

高槻市文化財年報

昭和61・62年度

I	埋蔵文化財の調査	1
	1. 昭和61・62年度の調査状況	
	2. 調査の概要	
	上土室遺跡 (No. 57)	宮崎 康雄
II	美術工芸品の調査	12
	慶福寺仏像調査報告	井上 正
III	文化財保護啓発事業	15
	1. 昭和61年度	
	2. 昭和62年度	
IV	研究ノート	16
	三島地方の縄文土器	森田 克行

1989年4月

高槻市教育委員会

高槻市文化財年報(昭和61・62年度)正誤表

ページ	行	誤	正
16	25	とも考えられる。	と考えられる。
22	13	a ₂ (3)	a ₃ 類(3)
27	12	B類	B種
29	10	3は	18は
29	12	4は	3は
30	3	V字(5)とO字(6・7)	V字(4)とO字(5・6)
30	4	V字(10)・O字(11)	V字(10)・O字(11)の
34	3	1と同じ	3と同じ
38	13	西麓産	西麓部
44	27	生駒西麓産	生駒山西麓
45	6	高まっとき	高まったとき
45	14	減少	現象
47	17	寺界寺遺跡	寺界道遺跡

I 埋蔵文化財の調査

1. 昭和61・62年度の発掘調査状況

昭和59年度(39件)、昭和60年度(42件)と年間40件前後であった調査件数は、昭和61年度には63件となり前年度に比べて約60%の増加となった。昭和62年度の調査件数も67件と漸増傾向を示している(表1)。これは景気回復に伴う開発ラッシュの結果生じたものとおもわれ、そのためか住宅建築や造成工事などの開発行為にともなう調査が多くなっている。この傾向は今後も続くと考えられる。公共事業関係では、道路や水路の改修や下水道の整備にともなう調査が、昭和59・60年度がそれぞれ10件前後であるのに比して、20件以上と倍増しているのが特徴的である。

遺跡別にみると、嶋上郡古跡が昭和61年度は30件、62年度23件と突出して多く、ついで安満遺跡(8件、6件)、郡家今城遺跡(5件、6件)、大蔵司遺跡(1件、4件)となり、例年と比べて大きな変化はみられない(表2)。ただ、新池遺跡や土室遺跡など周知の埋蔵文化財包蔵地以外の地域においても試掘調査を実施した結果、あらたに埋蔵文化財の存在を確認するなどの成果が認められた。

最後に、昭和61年・62年に調査を実施した遺跡について、その概略を一覧表にして掲げておく(表3)。

年度	種類	個住	人宅	共住	同宅	倉庫等	造工	成事	道路・水路 改修	上下水 道整備	その他	計
61		13		5		4		9	19	8	5	63
62		24		4		4		6	14	6	9	67

表1 昭和61・62年度調査件数

遺跡名	61年度	62年度	遺跡名	61年度	62年度	遺跡名	61年度	62年度	
嶋上郡古跡	30	23	氷室塚古墳	1	4	天神山遺跡	0	1	
阿武山古墳	1	0	宮田遺跡	0	2	埴神塚古墳	1	0	
嶋山古墳群	1	0	富田遺跡	1	2	上田部遺跡	0	1	
塚原古墳群	0	1	郡家本町遺跡	1	0	高槻城跡	1	2	
上土室遺跡	1	0	郡家今城遺跡	5	6	古曾部南遺跡	1	1	
新池遺跡	0	1	津之江南遺跡	1	0	安満山古墳群	0	1	
土室遺跡	0	1	東五百住遺跡	1	0	安満北遺跡	2	1	
香山古墳	0	1	鮎川遺跡	0	1	安満遺跡	8	6	
塚穴古墳群	0	2	宮ノ川原遺跡	0	1	大塚西遺跡	0	1	
上野遺跡	0	1	大蔵司遺跡	1	4	梶原寺跡	3	1	
今城塚古墳	1	0	芥川遺跡	2	0	梶原南遺跡	0	2	
							合 計	63	67

表2 昭和61・62年度遺跡別調査件数

No.	登録名(地区)	所在地	申請者	用途	面積(㎡)	出資	開業期間	備考
1	鶴上郡御膳	清原町982-1 2-2番	西野本利組合	水路改修	89.10	森田	昭.4.30~4.12	鶴上郡御膳池開通後池免置 跡地整理(昭一(昭原11)に 記載)
2	5-M-N	郡家町318	横 誠三	個人住宅	300.00	大島	昭.4.21~6.10	*
3	54-B-F-J-N	郡家町352	吉岡善一朗	造成工事	1953.00	森田	昭.4.22~5.12	*
4	45-1-J-M-N	郡家町254	林 富太郎	*	1695.00	藤+江	昭.4.30~6.28	*
5	75-J	川西町113-46	川口 俊行	個人住宅	60.36	宮崎	昭.5.8	遺構・遺物なし
6	48-C	川西町1-954-10	渡川 勝久	*	50.07	森田	昭.5.8	*
7	54-C-D-G-H	郡家町355	横 友次郎	造成工事	902.00	*	昭.5.8~5.13	昭原11に記載
8	54-C-G	郡家町354	横 隆	*	564.45	*	昭.5.8~5.13	*
9	5-L	清原町216-5	足 真壽夫	個人住宅	66.04	大島	昭.6.28	包含勝後池、遺構・遺物なし
10	18-B-F	清原町895-1	比本 政吉	倉庫兼事務所	432.30	橋本	昭.6.6~6.21	昭原11に記載
11	18-R	郡家町32	高橋市長	下水道管渠	116.56	*	昭.8.6~9.23	100年記念の遺構・黒色土層 残存
12	6-1-M,5-A-84-M 65-A-E	郡家町245,342	関西産業興	道路整備	569.48	藤+江	昭.8.11~8.25	包含勝後池
13	54-A-E-1	郡家町351	*	宅地造成	580.00	*	昭.8.26~9.3	遺構・遺物なし
14	4-P	郡家町746	高橋市長	水路改修	4.20	大島	昭.8.26~9.3	遺構・遺物なし
15	4-L-P	郡家町地内	*	道路整備	10.00	*	昭.8.26~9.3	包含勝後池、舟倉~中倉の 遺物出土
16	4-C-G-L-P	郡家町944池5番	*	水路改修	27.50	*	昭.8.26~9.2	遺構・遺物なし
17	6-K	清原町686-3	飯田 晃	個人住宅	133.30	橋本	昭.10.13~10.26	明治時代以降の遺構・遺物 残存
18	54-B-C-F-G-J-K	郡家町353-3~4	関西産業興	資料館兼造成	593.62	*	昭.10.27~10.29	遺構・遺物なし
19	45-J-K-N-O	郡家町253	大塚田 芳雄	共同住宅	631.54	藤+江	昭.11.5~6.23,24	昭原11に記載
20	18-K-L,18-B-F-J	郡家町208-1(池2番)	高橋市長	水路改修	119.46	宮崎	昭.11.17~11.27	舟倉~中倉時代の遺構・遺物 残存
21	53-D-H-L	郡家町地内	*	道路整備	69.00	大島	昭.12.1~12.3	柱欠、墓ちこみ残存・遺物 なし
22	42-B-G	*	*	水路改修	57.08	延城	昭.12.8~12.16	遺構・遺物なし
23	1-K,L,3-B-F- 1-L,M,11-D-B-L	郡家町地内	*	道路整備	1370.00	橋本	昭.1.14~1.29	*
24	54-B-L,M-D-1	郡家町357	関西産業興	資料館兼造成	823.71	大島	昭.1.29~1.29	土塙・碑残存、石石室~ 古墳時代の遺物出土
25	50-A-B-E-F	郡家町250	*	宅地造成	656.00	*	昭.1.29~2.14	昭原11に記載
26	26-B-C-P-G	郡家町322-1(池2番)	高橋市長	水路改修	53.03	橋本	昭.1.29~2.7	舟倉~古墳時代の遺構・包 含勝後池
27	65-K	川西1丁目1078	近藤タカコ(株)	倉庫建設	277.53	宮崎	昭.2.6	遺構・遺物なし
28	5-K-O	郡家町216-3	井原 豊秀	個人住宅	363.63	大島	昭.2.16~2.17	*
29	44-B	郡家町345-2	熊 隆	農装具小屋	489.00	藤+江	昭.2.26	*
30	77-H, 78-E	川西1丁目1078	藤本 孝二	個人住宅	61.70	宮崎	昭.3.2	*
31	44-P,45-H, 54-D,35-A	郡家町342	土田 充弘	造成工事	433.00	大島	昭.4.10~4.2	昭原12に記載
32	54-J-N	郡家町353-1	下村 悦子	共同住宅	414.63	*	昭.4.10~4.14	*
33	84-N	今城町191-7	平田 広勲	個人住宅	63.28	宮崎	昭.4.30	遺構・遺物なし
34	77-L	川西1丁目1078-11	西本 正廣	*	61.93	藤+江	昭.6.18	昭原12に記載
35	15-L	郡家町313-1	ラシキ石造興	仁心(株)併	10.30	橋本	昭.6.23	遺構・遺物なし
36	77-L	川西1丁目1078-5	小林 定男	個人住宅	82.36	藤+江	昭.7.34	昭原13に記載
37	65-K-L-O-P	郡家町235-1(池2番)	宮 崇	露天駐車場	1848.00	*	昭.7.29~9.9	*
38	48-G	川西1丁目954-21	土川 博利	個人住宅	57.58	藤田	昭.8.24	*
39	38-A	清原町915-11	龍田 勲	*	153.97	橋本	昭.8.25~8.28	*
40	43-N	郡家町336-3	藤岡 秀吉	*	69.81	*	昭.9.25	遺構・遺物なし
41	47-F	川西1丁目1088-5-6	竹部 真生	*	138.29	*	昭.9.28	昭原13に記載
42	38-I	清原町1351	清水 康夫	*	267.86	*	昭.10.13~10.15	*
43	36-A	今城町187-20	古久保 辰巳	*	61.34	藤+江	昭.10.20	遺構・遺物なし
44	48-N	川西1丁目969-1	清井 成孝	*	560.14	橋本	昭.11.13~11.14	昭原12に記載
45	64-A-D,65-A	郡家町358池2番	高橋市長	水路改修	132.00	宮崎	昭.11.16~12.23	*
46	25-B-D	郡家町288地主	*	道路整備	580.00	森田	昭.11.24~12.23	*
47	48-F	郡家町365-17	上杉 博徳	個人住宅	59.34	宮崎	昭.11.26	遺構・遺物なし
48	6-E	清原町24-1	横村 敏夫	*	520.30	*	昭.11.26	*
49	14-D-K-L, 15-E-G	郡家町321池2番	高橋市長	道路整備	101.00	*	昭.12.1~12.21	昭原13に記載
50	27-C-G-K-O	清原町地内	*	水路改修	176.50	藤+江	昭.12.7,12-17	*
51	27-B-C	清原町809-861	*	水路改修	54.00	*	昭.12.12~12.23	*
52	2-A-E,1-M, 11-A-E,1-M	郡家町718-1(池18番)	*	水路改修	347.00	大島	昭.12.22	*
53	3-H-N,11-1-J	郡家町733池12番	*	道路整備	136.00	*	昭.1.7	*

表3 昭和61・62年度調査一覧

No.	通称名(地区)	所在地	申請者	用途	面積(㎡)	世帯	調査期間	備考
54	阿武山古墳	大字赤原946-212地5筆	高槻市長	上記施設建設	365.00	宮崎	昭.4.19~4.20	遺跡・遺物なし
55	阿武山古墳群	阿武山1丁目944-540地22筆	(宮)真境寺	宗教施設建設	157144.36	大越	昭.7.23~8.20	遺跡11に帰属
56	菅原古墳群	菅原3丁目62-1	井上初火	事務所・作業所建設	323.31	高成	昭.7.3	遺跡・遺物なし
57	上土宮遺跡	上土宮5丁目578地5筆	日本電報電話	遺跡発掘	33241.90	宮崎	昭.5.16~3.31	本宮発掘
58	新島遺跡	上土宮1丁目1地43筆	緊急電機機	遺跡発掘	49900.00	森田	昭.10.5~11.17	塚輪遺・創立後遺物出土昭和43年度以降全面調査
59	土室遺跡	上土宮1-9-54丁目	高槻市長	本跡新築	約40000.00	〃	昭.10.10~昭.1.7	自然流況・塚輪検出
60	香山古墳	上土宮5丁目1	大仏建設	墓園整備	9.75	宮崎	昭.11.24	河原中遺土確認・遺物なし
61	野原古墳群	野原5丁目254	高槻市長	道路新設・改良	660.00	大越	昭.6.15~11.30	古墳3基検出
62	〃	野原5丁目260-1地2筆	〃	〃	368.00	〃	〃	〃
63	上野遺跡	郡家本町52-1	高槻市教育員	保育園新築	1030.00	榎本	昭.8.18	遺跡・遺物なし
64	今城岡古墳	郡家新町653地3筆	高槻市長	本跡改修	34.00	高成	昭.12.8~12.11	〃
65	水宮南古墳	水宮町2丁目901-8	武田地一朗	個人住宅	88.43	宮崎	昭.7.29	〃
66	〃	水宮町2丁目438-4	監督安男	〃	81.21	森田	昭.8.12~8.13	調査13に帰属
67	〃	水宮町2丁目586-6	足文藏夫	〃	61.15	〃	〃	〃
68	〃	水宮町2丁目586-7	藤野伸介	〃	81.33	〃	〃	〃
69	〃	水宮町2丁目586-8	藤田孝次	〃	61.14	〃	〃	〃
70	宮田遺跡	宮田町3丁目23-1	門川芳美	〃	450.00	〃	昭.5.18~5.21	〃
71	〃	宮田町3丁目23-3-5	約小園工務店	住宅・事務所等	465.00	大越	昭.5.18~6.2	〃
72	宮田遺跡	宮田町4丁目28-17地1筆	野田 聡	共同住宅	518.43	榎本	昭.9.8	遺跡・遺物なし
73	〃	宮田町6丁目	高槻市長	下水道整備	69.33	〃	昭.6.25~7.24	〃
74	〃	宮田町4-6丁目	〃	〃	500.00	〃	昭.7.29~7.31	〃
75	郡家本町遺跡	郡家本町978	久保田 寿	個人住宅	718.55	宮崎	昭.5.16	〃
76	郡家今城岡遺跡	水宮町1丁目981-12	広瀬武志	〃	127.17	榎+江	昭.7.7	調査11に帰属
77	〃	郡家新町90-1	西田政信	共同住宅	613.00	大越	昭.10.22~10.28	奈良時代の土器出土・遺物なし
78	〃	水宮町1丁目774地	高槻市長	道路整備	680.00	〃	昭.12.16~12.26	奈良~平安時代の礎定柱礎石・溝・土器検出
79	〃	郡家新町41-42	〃	水跡改修	88.00	森田	昭.1.16~2.3	平安前後の土葬・墨墨土器検出
80	〃	水宮町1丁目778	今井重作	共同住宅	1115.00	〃	昭.3.18~5.9	調査13に帰属
81	〃	水宮町1丁目765-766-3	〃	〃	951.00	榎+江	昭.9.2~12.1	〃
82	〃	水宮町1丁目781-7	吉田 豊	個人住宅	107.07	榎本	昭.9.4	〃
83	〃	水宮町1丁目773	河野 敏昭	作業用小屋	12.00	榎+江	昭.10.26	遺跡・遺物なし
84	〃	水宮町1丁目764-3	今井重作	駐車場造成	366.00	〃	昭.10.26~12.1	調査13に帰属
85	今城岡遺跡	水宮町4丁目	高槻市長	本跡改修	371.70	榎本	昭.11.26~12.23	遺跡・遺物なし
86	〃	郡家新町41	福見こう	共同住宅	950.00	〃	昭.11.20	調査13に帰属
87	津之江古墳跡	津之江北町地内	高槻市長	道路整備	80.00	宮崎	昭.12.1~12.2	包含層確認 遺物なし
88	東五百住遺跡	新+丘南町371-1	田中第十朗	神社拝堂建設	3612.78	榎+江	昭.8.2	遺跡・遺物なし
89	船川遺跡	船川町1406-2	高槻市教育員	7-6公民館工事	375.00	榎+江	昭.8.19	〃
90	宮之川遺跡	宮之川郡5丁目3-1	荒山長徳	外庫新築	1323.22	森田	昭.7.13	調査13に帰属
91	大塚可遺跡	大塚町2丁目204-2	奥田政明	遊樂場造成	399.00	榎本	昭.11.12	遺跡・遺物なし
92	〃	大塚町3丁目119-118	仁部定和	宅地造成	3655.90	榎本	昭.4.13~5.9	調査13に帰属
93	〃	大塚町3丁目109	山口孝治	赤塚建設	779.43	〃	昭.5.11~5.16	〃
94	〃	大塚町3丁目216-1-2 217-1	古藤茂吉	宅地造成	1376.00	〃	昭.5.26~5.29	〃
95	〃	大塚町3丁目214-215	奥田政明	個人住宅	1365.38	〃	昭.6.29~7.24	〃
96	芥川遺跡	蟹町24-3地1筆	高槻市長	本跡改修	30.10	〃	昭.10.9~10.15	遺跡・遺物なし
97	〃	蟹町32地3筆	〃	〃	345.80	〃	昭.1.19	〃
98	天神山遺跡	天神町3丁目933-10	〃	施設改修工事	2356.00	〃	昭.10.23~10.26	〃
99	足跡南古墳群	天神町1丁目1004	藤井繁子	個人住宅	241.00	榎+江	昭.3.2	古墳群遺跡
100	上田町遺跡	上田町19	阪急電機機	高架歩道	714.00	田代	昭.7.29~8.27	古墳群遺跡~奈良時代の土器出土・遺物なし
101	高槻城跡	城内町1498-6	大阪造幣局	事務所建設	1500.00	森田	昭.9.1~11.7	「高槻城三ノ丸跡発掘調査委員会1987年調査」高槻城跡跡跡調査
102	〃	城内町1015-10	内藤智雄	個人住宅	114.48	宮崎	昭.3.23	遺跡・遺物なし
103	〃	大平町1129-12-15	三矢 栄蔵	〃	254.34	榎+江	昭.5.15	〃
104	古賀南遺跡	古賀郡町3丁目172-1地1	高槻市長	道路改良	1540.00	高成	昭.2.9~3.6	古墳・奈良時代の土器出土・遺物なし
105	〃	古賀郡町3丁目19地	〃	〃	500.00	榎本	昭.10.30~10.34	遺跡・遺物なし
106	安曇山古墳群	安曇郡所の町1035-1	高槻市長	墓池造成	1000.00	〃	昭.4.6~4.13	塚輪検出・遺物なし
107	安曇北遺跡	安曇中の町475-2	木澤 洋	宅地造成	330.00	〃	昭.4.17	遺跡・遺物なし
108	〃	安曇中の町487	吉田 義雄	共同住宅	163.99	宮崎	昭.12.23	〃

No.	遺跡名(地区)	所在地	申請者	用途	面積(m ²)	形状	調査時期	備考
109	安曇北遺跡	安曇町の町501-5	川田秀夫	個人住宅	427.00	楕本	01. 4. 6	＊
110	安曇遺跡	高岡町200	柳大江建設	宅地建設	1233.00	＊	01. 5. 9-6.24	調査1回に帰属
111	＊	高岡町12-1他	高岡市長	下水道整備	820.00	＊	01. 6.26	遺跡・遺物なし
112	＊	高岡町29-1	＊	＊	154.06	＊	＊	＊
113	＊	高岡町119-1他	＊	＊	1000.00	＊	＊	＊
114	＊	八丁町246-17他2筆	＊	＊	215.00	宮崎	01. 7.10-10.13	調査1回に帰属
115	＊	高岡町100他	＊	＊	4000.00	＊	01.11.14-11.23	遺跡・遺物なし
116	＊	八丁町140他	＊	＊	1600.00	森田	01.12. 2-12. 3	＊
117	＊	八丁町270-1他	高岡市教育長	フェンス設置工事	5450.00	高岡	02. 3.25-3.26	＊
118	＊	高岡町7-13付近	高岡市長	下水道整備	2167.00	楕本	02. 6.20-7.18	＊
119	＊	八丁町13-19付近	＊	＊	2710.00	高岡	02. 7.20-7.31	＊
120	＊	高岡町9-12付近	＊	＊	2543.00	＊	＊	＊
121	＊	八丁町112他	新島電産機	高層事務所	168.50	田代	02. 7.20-8.27	弥生時代前期の大溝・土器 を検出
122	＊	八丁町189	京都大学	石造建築費	81.00	森田	02. 8. 5-8.15	調査1回に帰属
123	＊	高岡町21	高岡市長	下水道整備	14.54	楕本	02. 8. 11	遺跡・遺物なし
124	大塚西遺跡	高岡町	企業	物流センター建設	＊	楕本	02. 9.10-9.18	＊
125	真原寺跡	高岡1丁目387他4筆	高岡市長	水路改修	160.00	＊	01. 4.16-4.22	＊
126	＊	高岡1丁目375-1	高岡市土地開発公社	水路整備	17.43	宮崎	01. 8.27-8.28	中世頃の落ちこみ、瓦・土 器類・埴輪・木炭検出
127	＊	高岡1丁目371-3	長谷川一雄	個人住宅	264.45	高岡	02. 3.26	遺跡・遺物なし
128	＊	高岡1丁目376-1・2	(株)田中寺	社寺建設	104.76	森田	02. 6.13	調査1回に帰属
129	真原西遺跡	高岡町8他	大塚府知事	経営住宅	9800.00	宮崎	02. 4.20-5. 5	「真原西遺跡発掘調査報告書」真原遺跡調査会1988に 帰属
130	＊	五箇町21-4	高岡市長官舎	公民館建設	996.50	＊	02. 5. 3-5. 5	＊

2. 調査の概要

上土室遺跡の調査 (No.57)

高岡市西部にある土室・塚原地区には、阿武山古墳・塚原古墳群や土保山古墳・香山古墳・新池遺跡(新池埴輪窯跡)などの著名な遺跡が集中し、三島地方の歴史をかんがえるうえで重要な地域である。上土室遺跡はその一角にあり、阿武山から南東に派生した標高40～50mを測る丘陵上に展開している。一帯は緩斜面をなす雑木林であるが、丘陵裾は一転して急傾斜となり平野部に至っている。

調査地は高岡市上土室5丁目578番地他5筆にあり、小字は長山である。昭和59年に隣接地を調査したときに土師器片が出土しているが、遺跡の時代・規模などは不明であった。

今回の調査は遺構を確認するために実施した。届出地は約36,000㎡と広範囲に及ぶのでまず全体を踏査した。その結果、土師器・須恵器・埴・石仏などを発見し中世墓等が存在すると予測した。次に17ヶ所のトレンチを設定し、それぞれA～Qの番号を付けた。各トレンチは重機で表土を除去後、人力で地山面まで掘削した。

なお、トレンチは遺構の有無・範囲を知るための最小限の数とし、遺構も2基の土壌墓を除いては検出面での確認のみにとどめた。

遺 構 (図版第4・5、図1・2)

基本的な層序は表土(0.1m)、暗黄灰色土(0.1m)、暗黄褐色土(地山)である。暗黄褐色土は0.1m堆積し、以下は赤褐色土となっている。各トレンチの概略をまとめたのが表4である。

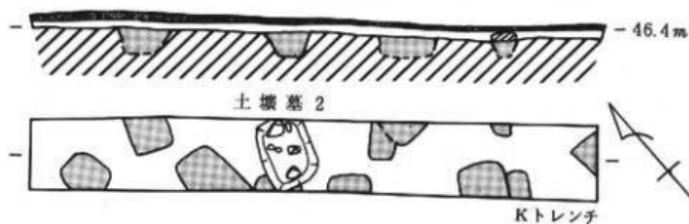
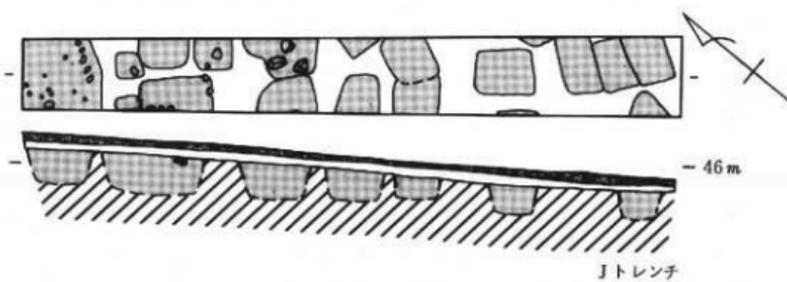
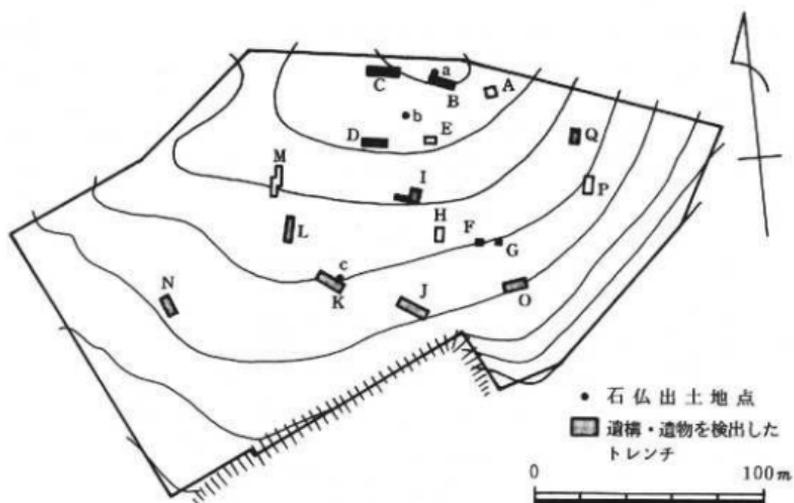
トレンチ	規模 (m)	遺構 (基)	遺物
A	2.5×4		
B	2.5×7	土墳(?) 1	石仏
C	2.5×10	土墳(?) 2	
D	1×9		須恵器(杯)
E	3×5.5		
F	2×3.5		土師器・須恵器(杯)
G	1×1		土師器
H	3×4.5		
I	2×10	土墳墓1	土師器(杯・鉢・甕) 須恵器(杯・蓋・壺・甕)
J	1.2×12	土墳墓約20	土師器・鉄釘・人骨
K	1.5×10	土墳墓約10	石仏・鉄釘
L	1.2×6.5	土墳墓2	鉄釘・人骨
M	1.5×10		
N	2×10	土墳墓約10	土師器
O	4×7	土墳墓6	土師器(甕)・須恵器(甕) 旧石器
P	3×5		
Q	3×5	土墳2	

表4 トレンチ一覧

つぎに調査をおこなった土墳墓2基について述べる。

土墳墓1はIトレンチで検出した。長さ0.8m、幅0.7m、深さ0.2mを測り、平面形は方形を呈している。主軸はほぼ磁北を示す。埋土は炭や焼土を含む暗黄灰色土である。墓底面や壁面は焼けていない。出土遺物は土師器・須恵器などの土器であり、完形品を含む。これらはいずれも埋土の上面で検出し、底で検出したものはない。一部は谷側へ流出した状況を呈していた。人骨や鉄釘等は出土していない。遺物からみて7世紀後半ごろと考えられる。

土墳墓2はKトレンチの中央で検出した。長辺1.3m、短辺0.9mの矩形を呈し、深さは0.5mを測る。埋土中より鉄釘や人頭大の石が出土した。土器等の遺物は出土しなかったが、他の調査例からみて鎌倉時代と考えられる。



■ 表土

□ 暗黄灰色土

■ 淡灰褐色土

0 5 m

図1. 上土室遺跡遺構図(1)

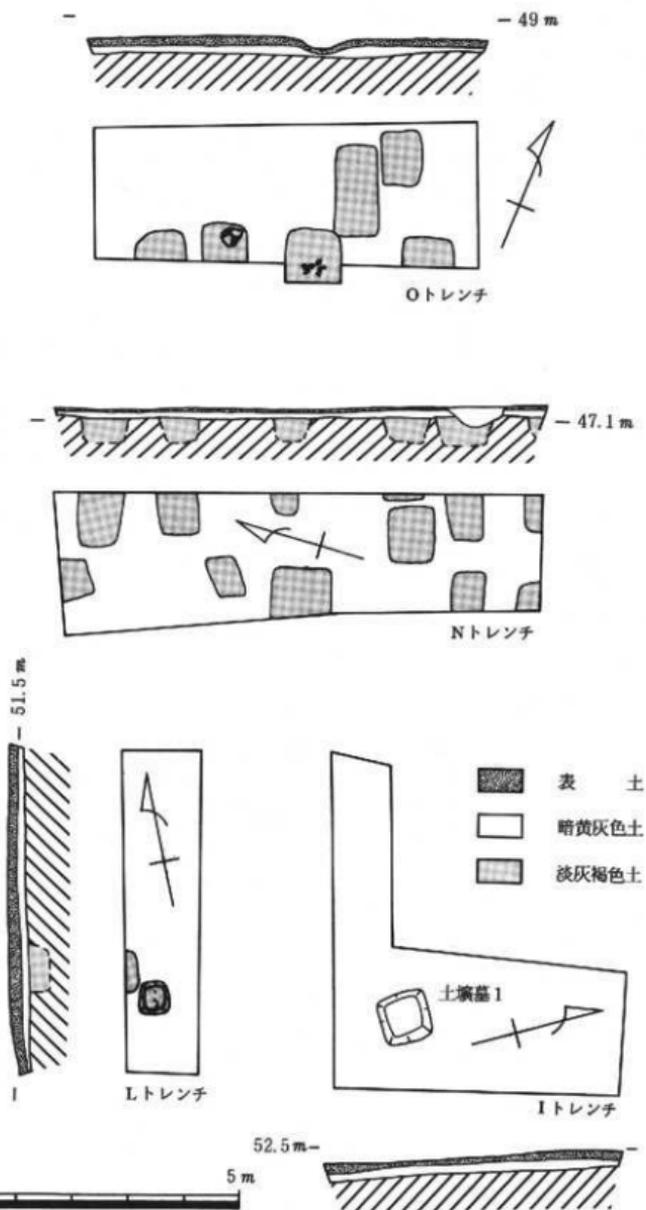


図2. 上土室遺跡遺構図(2)

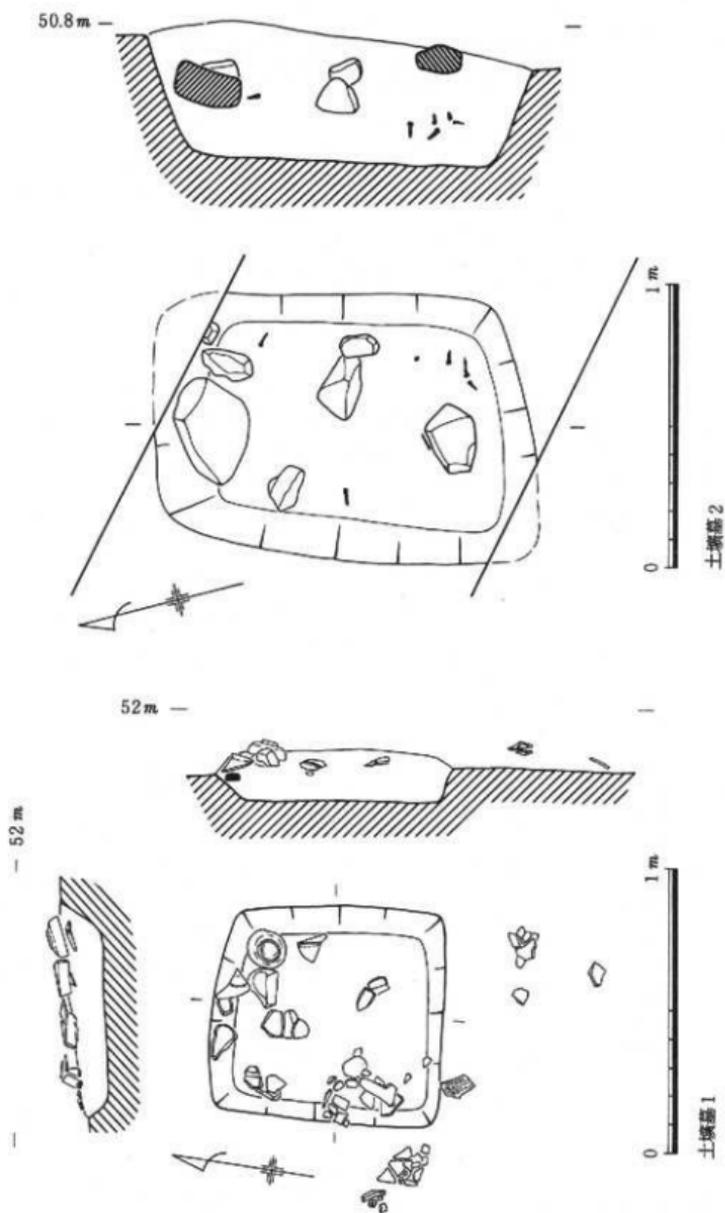


图 3. 上土室遺跡 土塚墓 1・2 平面図・断面図

遺物(図3・4)

トレンチ及びその周辺からは古代・中世の遺物が出土したのでその概略を述べる。

土墳墓1出土の遺物として、土師器(杯1、鉢1、甕2)・須恵器(杯1、蓋4、壺1、甕1)及び少量の焼土塊がある。

土師器杯(1)は口径19.4cm、現存高4.1cmを測る。口縁部は緩やかに内弯し、端部は外反する。外面は粗いヘラミガキ、内面には左上がりの斜放射暗文が施されている。色調は黄茶灰色を呈している。鉢(2)は口径18cm、器高7.6cmを測る。偏平な底部から緩やかに内弯する体部をもち、口縁端部は内傾面をなす。色調は暗茶褐色である。甕は2個体分出土した。3は口径15.4cm、現存高7cmを測る。全体に風化が著しい。

須恵器杯(4)は口径10.5cm、現存高3cmを測る。5は口径13cm、器高4.7cmを測る完形品である。外方へ張り出した高台は高く、その径は底部に比べて小さい。胎土には多くの白色砂粒を含み、もろい。色調は暗灰色である。蓋は4個体分出土した。すべて口縁部片である。それぞれのかえりにはオリコミ(6)、ヒネリダシ(7)の両手法が認められる。壺(8)は長頸壺の体部である。肩部に1条の沈線と列点文を施している。

土墳墓2から出土した土器は1点もなく、鉄釘を7本検出したのみである。これらは全長約6cmを測り、断面は方形を呈している。全体に腐食が進む。

そのほか、トレンチやその周辺でいくらかの遺物を認めた。このうち土師器・須恵器等の土器類は大半が中世に属している。Oトレンチの土壌墓埋土中に多く、他のトレンチからの出土量は少ない。埴は十数点出土した。軟焼成で赤褐色を呈するものや硬質で暗灰色を呈するものがある。すべて小片である。

石製品としては、Oトレンチから出土したナイフ形石器と石仏がある。

石仏(a～c)は遺構から出土したものではない。3体とも阿弥陀仏を陽刻している。a・bは上半身のみ陽刻するのに対し、cは全身及び蓮座を薄肉彫で表現している。石材はaが安山岩系、b・cは花崗岩系である。

そのほかにはKトレンチ付近で採集した鉄滓がある。時期は不明である。

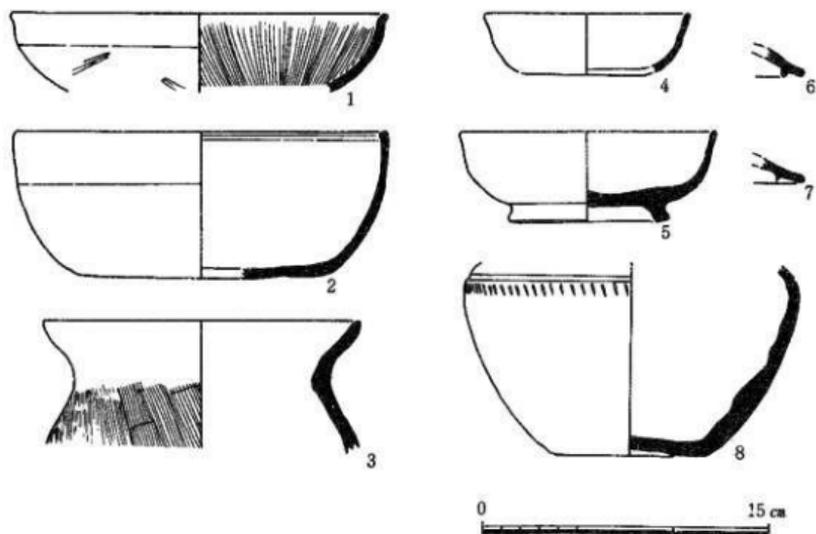


図4. 土墳墓1出土土器 土師器(1~3), 須恵器(4~8)

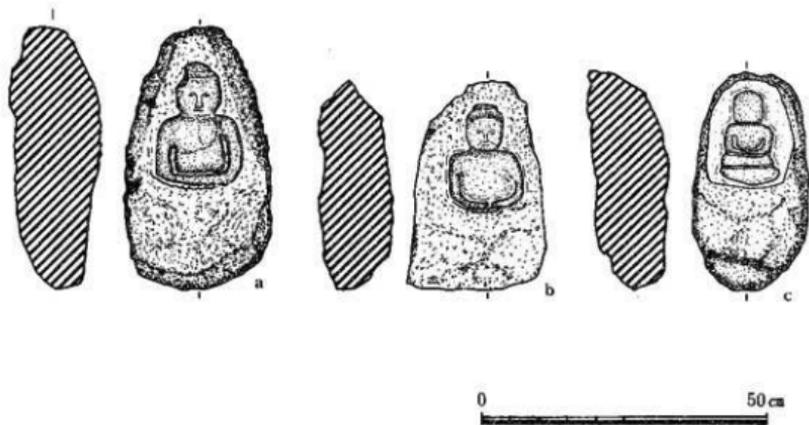


図5. 石仏 Bトレンチ(a), 表探(b), Kチレンチ(c)

まとめ

上土室遺跡はこれまで弥生時代の遺跡と考えられていたが、今回の調査によって古代・中世の墓地であることが明らかとなった。その分布に関しては、ほとんどのトレンチからなんらかの遺構・遺物を検出していることから、南向きの緩斜面を中心として調査地全体に墓域が広がっているとみて大過ない。

白鳳時代の墓は、1基しか検出できなかった。しかしながらIトレンチ以外にも7世紀末ごろの遺物が出土していることからみれば、同様の土墳墓が存在すると考えられる。その分布範囲は遺物の出土状況から、南側斜面の上半部を中心とした比較的狭い範囲であろう。

いっぽう中世墓は南斜面を中心にしてほぼ全域に分布するようである。なかでもK・J・N・Oトレンチの周辺に密集している。過去の調査例をみると、上土室遺跡の東方約1kmに広がる岡本山古墓群では、土墳墓が数基づつの単位でまとまって約100～200基の群をなしていた。本遺跡も分布のあり方が似ていることから同様な単位で構成していると考えられる。

土墳墓は調査を実施した土墳墓2など、1m×1.3m前後の方形プランをもつものが大半である。また、墓墳の規模や出土した鉄釘の位置関係から判断して、内部には0.5m×0.8m×0.4m程度の木櫃を埋納していたと考えられる。人骨が焼けている反面、墓墳は焼けておらず、埋土にも炭や焼土は含まれていない。どこか別の場所で火葬した後に埋葬したようである。その他には墓墳壁面が焼けているものや小規模な墓墳内に炭・人骨・鉄釘が無造作に埋納されている例も認められる。ただ、この二者は数が少なく、特殊な例と考えられよう。

遺物に関しては、遺構をほとんど掘削していないためにまとまった資料を得ることはできなかった。表採資料の中には塚が多く認められた。これは古墓群という遺跡の性格からすれば、この遺物も墓に関連したものと理解できよう。 (宮崎 康雄)

II 美術工芸品の調査

市内の寺社所蔵の美術工芸品等調査の一環として、昭和61年度は慶瑞寺所蔵の仏像調査を実施した。調査は大阪府文化財保護審議会委員井上正氏に依頼し、昭和61年9月6日に現地調査を実施、報告を得た。

慶瑞寺は、祥雲山と号し黄檗宗(禅宗)万福寺末で観世音菩薩を本尊とする。

寺伝によれば、持統天皇8年(694)、宇治橋架橋などで知られる僧道昭の開基にかかる。法相宗に属して景瑞寺と称したが中世兵乱のため衰え、寛文元年(1661)頃、普門寺の禅僧龍溪が堂舎を再興したと伝えられている。

なお菩薩形坐像は、昭和62年7月1日に大阪府指定有形文化財の指定を受けた。

慶瑞寺仏像調査報告

井 上 正 (京都国立博物館学芸課長)

- 〔名 称〕 菩薩形坐像(図版第6)
- 〔員 数〕 1軀
- 〔所 蔵〕 高槻市昭和台町二丁目25番12号 慶瑞寺
- 〔法 量〕 像 高 57.6cm 面 奥 12.5cm 坐 奥 26.3cm
髪際高 46.5cm 耳 張 12.3cm 膝 張 37.5cm
頭 長 20.9cm 胸厚(右) 12.3cm 膝高(左) 9.0cm
面 長 9.4cm 腹厚(含衣) 13.0cm 同(右) 9.6cm
面 幅 9.6cm 肘 張 28.5cm
- 〔形 状〕 垂髻・天冠台をつけ、髪際は振り分け式、耳朵は貫通する。左手は膝上で持物を執る形をなし、右手は屈臂して第1・2指を相捻じ、臂銅・腕銅をつける。条帛・天衣・裳をつけ、左足を上にして結跏趺坐する。
- 〔品 質〕 カヤ・素木造
- 〔構 造〕 両足部を含め縦木1材を用いて彫り、左手首先、右前脚半ば、天衣の左膝上より先などでそれぞれ別ぐ。
- 〔保存状況〕 (後補)冠帯左方(菊座を含む)、同右方腕の一部、垂髻・遊離部(左右とも)、左手首先、右前脚半ばより先、裳先の一部、胸飾(銅製)、底板(麻布貼・漆)、持物、光背、台座
(欠失)冠帯右方、天衣遊離部

〔説 明〕 カヤの一本を用いた代用檀像の古作で、おそらく観音菩薩を表したものとみられる。胴部が引き締まり、足膝部の奥行きが深くとられている点や、髪・肉身・衣文などの感触は、奈良時代の乾漆像の様風を木彫に移しかえた感がある。一方、冠帯が肩のあたりで大きく翻るあたりは、檀像素彫像の古作に同様の例があり、おそらく中国からの渡来檀像に倣ったものであろう。また、当初の本像は、上半身がかなり後方へ反ったポーズをしていたことが、地付面の構成の修正によって明らかであり、これも一木造の古式のものに多い。

本像の製作年代は一応9世紀とするのが妥当であろうが、以上のような点からすれば、8世紀に遡る可能性も考えられよう。檀像系古密教尊像に多くみられる個性的な表現として、長く引かれた秀でた肩、眼頭が鼻梁にまで及ぶ切れ味の鋭い眼、そしてやや分厚い唇など、唐を経て伝えられたインド風を偲ばせるものがある。わが国代用檀像の初期作品のなかに、新たに個性的な一例を加えることになった。

- 〔名 称〕 如来形坐像
- 〔員 数〕 1 軀
- 〔所 蔵〕 高槻市昭和台町二丁目25番12号 慶瑞寺
- 〔法 量〕 像 高 87.7cm 面 幅 17.0cm 腹厚(含衣) 25.0cm
 髮際高 74.8cm 面 奥 21.1cm 肘 張 53.2cm
 頭 長 28.6cm 耳張(現状) 21.5cm
 面 長 17.0cm 腹 厚 21.3cm
- 〔形 状〕 螺髪(刻出)、白毫相を表す。大衣は左肩よりかかって右肩を少し掩う。寺では、釈迦如来としているが、印相の部分はいずれも後補であり、当初は薬師如来であった可能性も考えられる。
- 〔品 質〕 ヒノキ・彩色(当初は素木か)
- 〔構 造〕 頭体部は耳後の位置で前後に割矧ぎ、内ぐりを施す。
 螺髪彫出(髮際螺髪数29、下5段、上10段)。彫眼。
- 〔保存状況〕 (後補)白毫(水晶製)、右耳朵、左手首先(袖口を含む)、右手肘先、左肩下がり、両足膝部のすべて、底板、光背、台座。
 (欠失)肉髻珠、左耳朵。

〔説 明〕 藤原時代12世紀後半を降らない如来坐像で、いわゆる定朝様の系列に属し、中央をやや外れた仏師の作であろう。両足膝部が後補なのが惜しまれる。

Ⅲ 文化財保護啓発事業

1. 昭和61年度

(A) 現地説明会

- ・昭和61年10月12日 高槻城三ノ丸跡(参加人数 285人)
- ・昭和62年2月22日 鴨上郡新跡(45-J・K・N・O地区)(参加人数 364人)

(B) 展覧会

- ・昭和61年7月26日～28日 「夏休み文化財教室」
一石器と玉つくりー
体験学習として高島石および滑石を使用し、石造丁・勾玉を製作(参加延べ 210人)
- ・昭和61年10月28日～11月3日 「民俗文化財展」
一生活・民俗用具ー(参加延べ 1582人)

(C) 歴史講座

- 『古墳時代の三島地方』(参加延べ 720人)
- ・昭和61年11月6日
「天皇陵と今城塚古墳」
水野 正好氏(奈良大学教授)
- ・昭和61年11月13日
「古墳出現の前夜」
酒井 龍一氏(奈良大学助教授)
- ・昭和61年11月20日
「摂津の豪族」
日野 昭氏(龍谷大学教授)
- ・昭和61年11月27日
「三島地方の古墳」
大船 孝弘氏(高槻市教育委員会技師)
- 『大黄河』(参加延べ 450人)
- ・昭和61年11月26日
「黄河文明と日本」
大庭 修氏(関西大学教授)
- ・昭和61年12月3日
「黄河流域の自然と経済」
河野 道博氏(関西大学教授)
- ・昭和61年12月10日
「黄河よもやま話」
藤巻 真澄氏(関西大学教授)
- 『仏像の美』(参加延べ 510人)
- ・昭和62年3月13日
「日本の木彫」
井上 正氏(京都国立博物館学芸課長)
- ・昭和62年3月20日
「日本上代の仏像ーその種類と表現ー」
清水 善三氏(京都大学教授)
- ・昭和62年3月27日
「平安時代の仏像ー密教の影象ー」
田村 隆昭氏(京都市立芸術大学教授)

(D) 市立埋蔵文化財調査センター見学者数

総数7,799人 (延人数57,633人)

(E) 市立歴史民俗資料館入館者数

総数19,662人 (延人数85,907人)

2. 昭和62年度

(A) 現地説明会

- ・昭和62年9月6日 川西古墳群(65-K・L・O・P地区)(参加人数 422人)
- ・昭和62年11月15日 塚穴古墳群(参加人数 478人)

(B) 展覧会

- ・昭和62年8月21日～23日 「夏休み子供文化財教室」
一古代の技術ー
高島石および大理石を使用し「石造丁」・勾玉製作の体験学習(参加延べ 180人)
- ・昭和62年10月27日～11月8日 「民俗文化財展」
一ちょうちん作りー(参加延べ 924人)

(C) 歴史講座

- 『中世期の高槻』(参加延べ 540人)
- ・昭和62年11月4日
「戦国時代の高槻」
藤田 修氏(大阪大学教授)
- ・昭和62年11月12日
「発掘された中世の村と墓」
坪ノ内 徹氏(奈良女子大学講師)
- ・昭和62年11月19日
「発掘された近世の町ー伊丹郡町を中心にー」
藤井 直正氏(大手前女子大学教授)
- ・昭和62年11月26日
「焼き物からみた中近世の社会」
橋本 久和氏(高槻市教育委員会技師)
- 『歴史の散歩道ー伊勢寺・能因塚コースを訪ねてー』(参加延べ 400人)
- ・昭和63年3月7日
「周辺歴史と史跡」
津津木秀甫氏(郷土史家)
- ・昭和63年3月9日
「伊勢と能因の世界」
野中 春水氏(神戸大学名誉教授)
- ・昭和63年3月16・17日
現地散策 津津木秀甫氏(郷土史家)
- (D) 市立埋蔵文化財調査センター見学者数
総数 5,168人 (延人数 63,035人)
- (E) 市立歴史民俗資料館入館者数
総数 17,209人 (延人数 103,116人)

IV 研究ノート

三島地方の縄文土器

森田 克行

はじめに

三島地方ではここ数十年來、急速な開発にともなうて数多くの発掘調査がおこなわれるようになり、旧石器時代から近世に至るまでの膨大な資料が蓄積されてきた。ところが、こと縄文時代の資料に関しては、弥生時代以降の集落跡や古墳の調査の際に、土器や石器などが散発的に検出される程度であって、これまで明確な遺構がともなった例としては茂木市の耳原遺跡で調査された晩期の土器棺墓群のみといっても過言ではない。このような資料の貧弱さから、三島では縄文時代の動向については多くを語る事ができないように思われ、資料の呈示も極めて断片的なものにとどまっている。しかるに最近の牟礼遺跡での井堰の発見や宮田遺跡での後期の一括資料の検出(B地点)などがあり、三島平野においても縄文遺跡の調査が緒についてきた。

小稿では、とりあえず、三島の縄文土器を集成して現状を把握し、今後の縄文遺跡の調査に備えたいとおもう。

1. 縄文遺跡と出土土器

各遺跡から出土した縄文土器を概述する。ほとんどの資料は今回はじめて整理したものであり、一部既報告の資料についてもあらたな資料を追補したり、その後の見解を付け加えている。

大塚遺跡(図版第7)

高槻市大塚地先の淀川河床に所在する。昭和46年の浚渫工事の際に、川底の埋積土から出土した資料^①である(図1)。

早期

1は深鉢の体部片で、器面は内外面とも二枚貝条痕で仕上げている。内外面に織維の焼失痕が多数認められ、早期末の東海系条痕土器とも考えられる。胎土は暗褐色を呈し、多量の金雲母を含んでいる。

前期

2は深鉢の体部片で、内外面とも条痕仕上げが顕著である。器壁は薄くて、堅緻。北

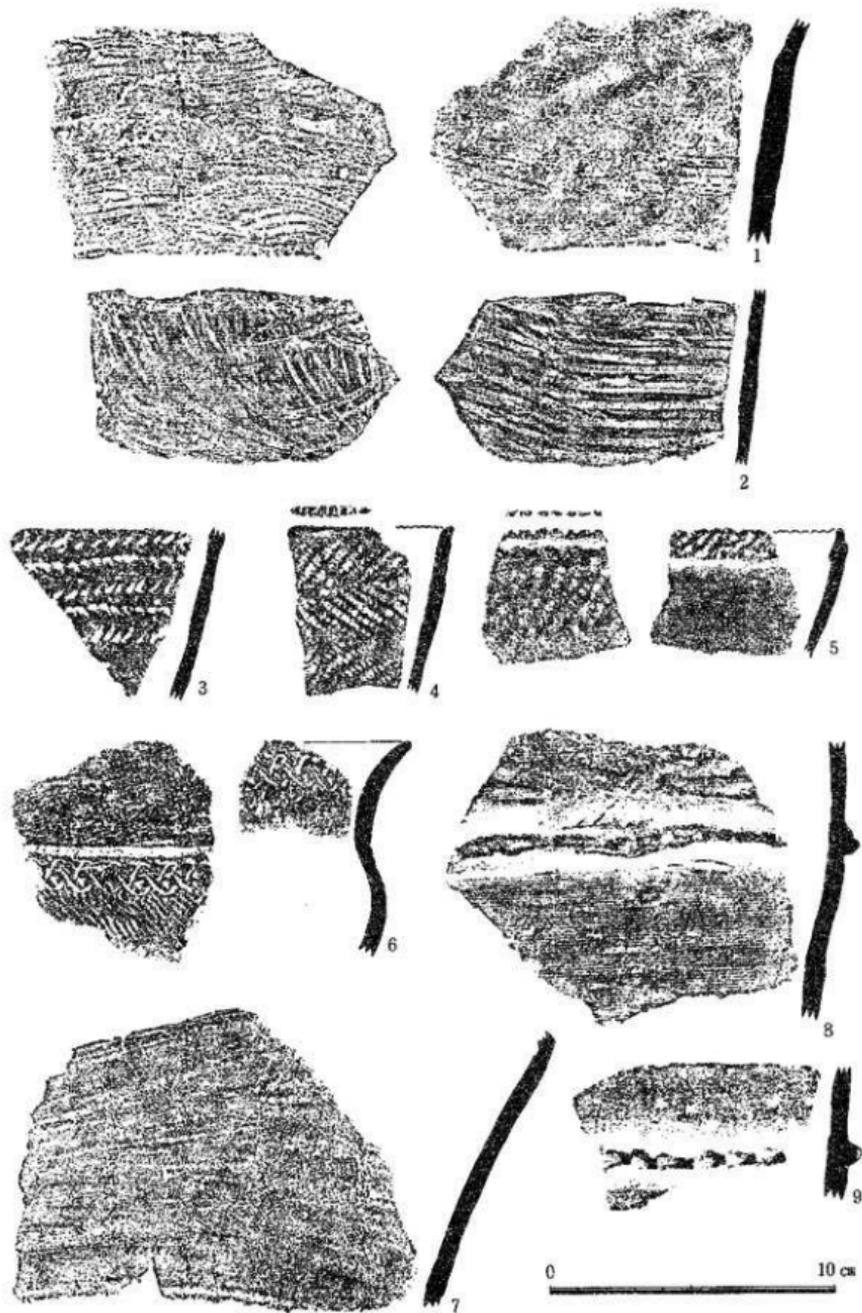


图1. 大塚遺跡(1~9)

白川下層Ⅰ式であろう。胎土は暗褐色を呈し、角閃石を含む。生駒西麓産。3は深鉢の体部片で、C字形爪形文を幾段にも積み重ねている。北白川下層Ⅱa式であろう。器壁は薄く、胎土に角閃石を含み、茶褐色を呈している。生駒西麓産。4は深鉢の口縁部片で、外面には口縁部直下から羽状縄文をほどこし、上端部に刻目をつけている。北白川下層Ⅱa式であろう。胎土には微細な角閃石を多く含み、淡茶灰色を呈す。生駒西麓産。5も深鉢の口縁部だが、上縁部の内外面に低平な突帯がつく。外面は突帯下にLR縄文の地文がみられ、内面にも口縁部にLR縄文を施している。口縁上端に刻目を付けている。北白川下層Ⅲ式に属す。胎土には砂粒を多く含み、暗灰色を呈する。

後 期

6は偏球形の体部に大きく外湾する口縁部をもつ深鉢の上半部片である。頸部の沈線下には結節縄文がみられるほか、口縁部内面にも結節部のみを回転させた文様が施されている。北白川上層式3期～一乗寺K式に属すものであろう。胎土には砂粒が目立ち、黒褐色を呈する。7は頸部が大きく外反する深鉢片で、口縁部は波状を呈する。内外面とも丁寧になでつけており、一乗寺K式とおもわれる。胎土は砂質だが、薄手の精緻なつくりで、黒褐色を呈している。

晩 期

8は深鉢の体部片で、中位に刻目のない不整な突帯が付いている。長原式に属する。胎土には角閃石を含み、茶褐色を呈している。生駒西麓産。9も深鉢の体部片で、刻目突帯を貼り付けている。胎土は8と同様で、生駒西麓産である。

資料中、3・4・5などはローリングをうけかなり摩滅しているが、大半の土器は遺存状態が良好で、2次的にもたらされたとはおもわれない。

柱本遺跡(図版第8)

高槻市柱本地先の淀川河床に所在する。大塚遺跡同様、昭和46年の浚渫工事の際に、川底の埋積土より出土した資料⁹⁾である(図2・3)。

前 期

1は深鉢の体部片で、LR縄文地に細い刻目突帯が縦走し、内面は条痕によって調整している。器壁は極めて薄い。北白川下層Ⅱc式であろう。胎土は精良で堅緻、色調は暗灰褐色を呈している。2は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片である。RL縄文地に刻目突帯が付加されている。北白川下層Ⅲ式とおもわれる。胎土にクサリ礫をかなり含み、淡茶褐色を呈している。3は深鉢の底部片で、復元すれば偏平な丸底になる。器壁は薄

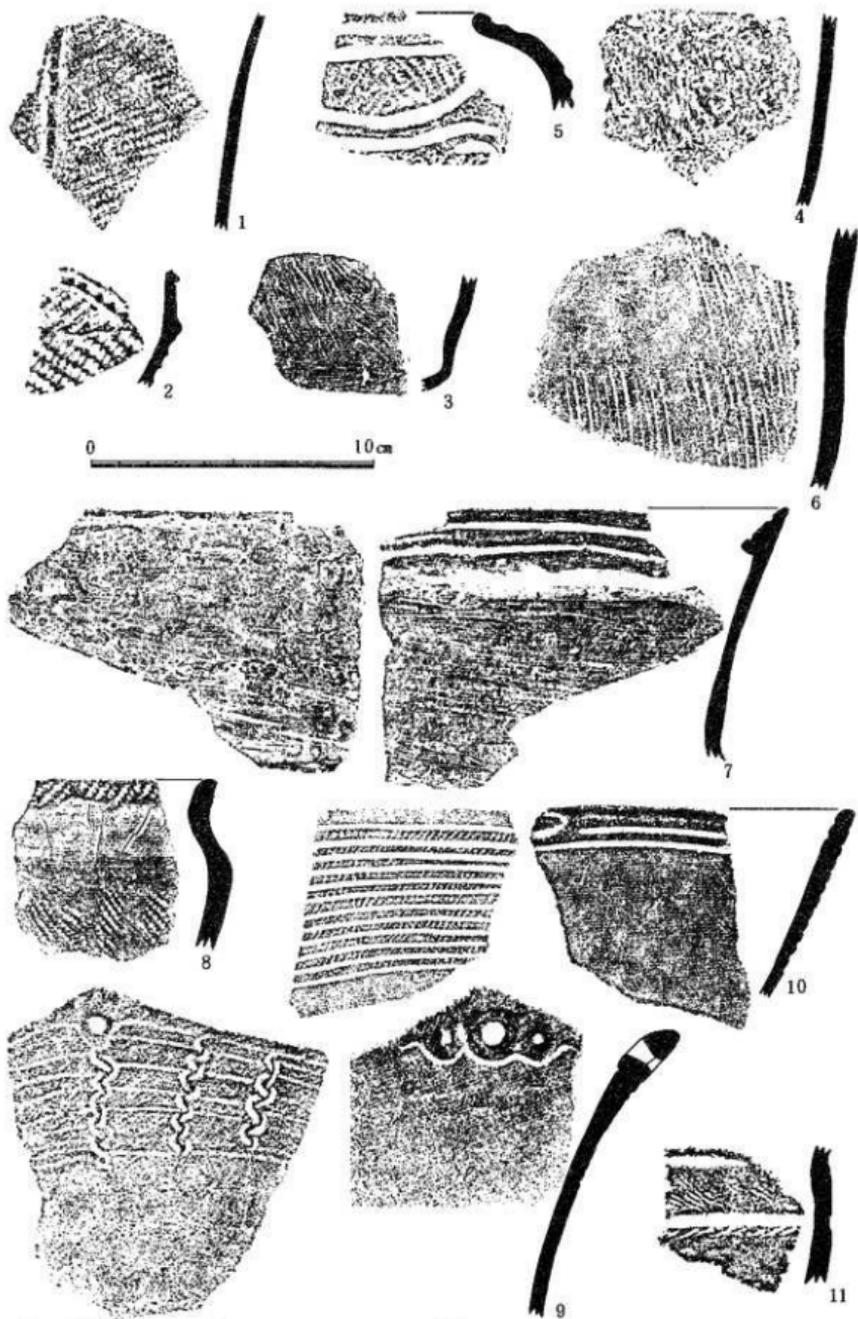


图2. 柱本遺跡(1~11)

く、外面に条度が著しい。北白川下層Ⅰ式であろう。胎土は精良な粘土を用いており、茶灰色を呈している。

中 期

4は深鉢の体部片で、外面には不鮮明だが縦走る粗い縄文がみられる。船元Ⅱ式の可能性が強い。胎土には片岩を多量に含み、淡黄灰色を呈している。搬入品。5は深鉢の口縁部片である。大きく内側に巻き込んだ口縁部の上端がわずかに立ち上がっている。外面は斜行縄文地の上方に1本の沈直線文が横走り、以下に太い沈曲線文が数段重ねられている。左右の破損した部分には渦巻文が描かれているものとおもわれる。当該品は東海地方の咲畑式土器と考えられる。色調は淡灰色を呈している。

後 期

6は深鉢の体部片で、外面に垂下条線がみられる。北白川上層式1～2期のものであろう。胎土には多くの角閃石を含み、茶褐色を呈する。生駒西麓産。7は深鉢の口頸部片で、内縁に突帯が付く。突帯上には2本の沈線がひかれている。北白川上層式1期であろう。胎土は精良で、堅緻。色調は黒灰色を呈する。8は丸底鉢の上半部の破片である。体部には幅の狭いRL縄文を縦に間隔をあけて転がした文様をほどこし、口縁部外面にも縄文帯をつけている。短く立ち上がる口頸部から推せば、北白川上層式2期とみられる。胎土には微細な角閃石を多く含み、茶褐色を呈している。生駒西麓産。9は波状口縁をもつ深鉢の口頸部片である。外面にはLR縄文地のうえに沈線文を6段ほどこしたのち、一定の間隔で蛇行文を重ねている。頂部には円孔を穿っている。また内面は頂部付近を肥厚させ、円孔の左右に刺突文を配している。さらに一条の沈線を肥厚部の下方に沿って刻んでいる。北白川上層式3期にあたり、加曾利BⅠ式の影響が強い。胎土は砂粒を多含するも、焼成は堅緻で、黒褐色を呈している。10は単純に外上方にひらく鉢の口縁部片である。外面はRL縄文地に12本の沈線を密にひいている。内面は丁寧なヘラミガキされており、口縁にはヘラによる直線文や楕円状の区画がみられる。北白川上層式3期に属する。胎土はやや砂質だが精良で、色調は淡茶褐色を呈する。11は深鉢の体部中位片で、外面に横走る2条の凹線がほどこされ、それぞれに幅の狭い斜行縄文が方向を違えて付設されている。元住吉山Ⅱ式であろう。胎土に微細な角閃石を多く含み、茶褐色を呈している。生駒西麓産。12は深鉢の口縁部片で、外面は条痕仕上げ、内面はナデ調整している。上端部は面をもち、内縁に一条の凹線を有する。元住吉山Ⅱ式～宮滝式とおもわれる。胎土は砂粒を多く含み、色調は黒褐色を呈す。13は鉢の体部上半の破片で、口縁部に3条の凹線がみられる。宮滝式に属するものであろう。胎土はや

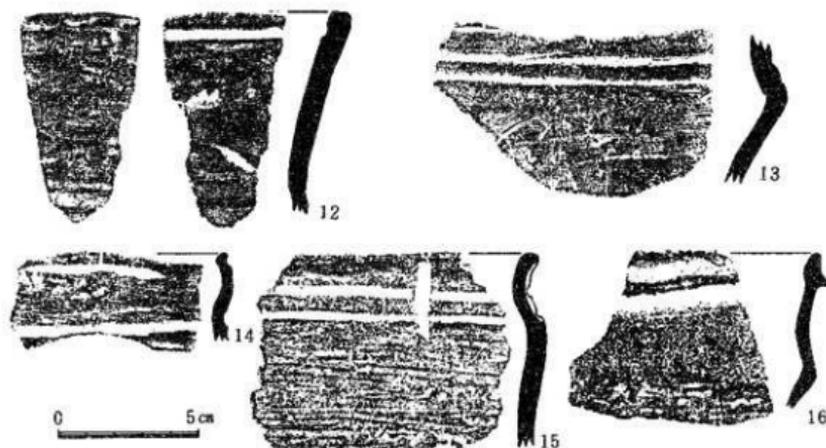


図3. 柱本遺跡(12~16)

や砂質で、淡灰色を呈している。

晩 期

14は内湾して上方に低く立ち上がる口縁部片で、復元口径が10cmと小さいことからみて、注口土器とおもわれる。上下端にそれぞれ凹線がめぐっている。滋賀里I式か。胎土に角閃石を含み、暗茶褐色を呈する。生駒西麓産。15は深鉢の口頸部片で、外面に巻貝条痕が顕著にみられる。口縁部に2条の凹線を有し、要所に縦方向の押しびき痕がある。滋賀里I式であろう。胎上には砂粒を多く含み、淡灰色を呈している。16は鉢の口縁部片で、上縁近くに一条の突帯を付している。体部外面の条痕は顕著である。滋賀里IV式の所産であろう。胎上に角閃石を含み、暗茶褐色を呈する。生駒西麓産である。

宮田遺跡(図版第9)

高槻市宮田町三丁目に所在する。遺跡は市域中央部を南流する芥川の右岸に広がる低位段丘の中央部に立地している。昭和46年の中世集落の調査時に、C区で縄文時代晩期終末の落ち込みを検出した(A地点)のと昭和63年にやはり中世期の水田跡の下層から縄文時代後期の落ち込みを検出している(B地点)。

A地点では落ち込みから145点の土器片が出土している(表1)。図4はこれらのなかからすべての口縁部・底部、それに胴部片の一部を図化したものである。器種は深鉢と浅鉢で、明確に壺と判断できるものはみられなかった。

なお、資料中にかなりの生駒西麓産土器が認められた。ここでは便宜上灰白色ないし灰褐色系の在地産を主体とするA種土器群と茶褐色系で胎土に必ず一定量以上の角閃石を含んでいる生駒西麓産のB種土器群(以下では単にA種・B種という)とに分けて記述していく。本稿ではこのほかの遺跡においても、晩期終末の資料でなおかつ一定の数量が確保できるものがあり、それらについても同様に対処していきたい。

A種の資料はほとんどが小片であり、その分類も大雑把なものにならざるを得ない。深鉢では、口縁部の突帯が上端に接して貼り付けられているa類(1~3)と上端よりやや下がったところに付されるb類(6~8)および突帯を付さないc類(10)に分けられる。a類には突帯上に刻目をもつa₁類(1・2)と刻目をもたないa₂(3)があり、b類についてもb₁類(6・7)とb₂類(8)がある。刻目ではD字・O字が目立っている。これらa・b類は9の体部片を示すまでもなく、その多くは2条突帯を有するものであろう。1・4のように体部上半がやや屈曲し突帯を施さない古い様相をもつものや8のように口縁部が内湾気味に立ち上がり、体部の突帯を欠いているとおもわれる新しいタイプのものも認められる。唯1点のみ検出したc類は屈曲部のない縦長の体部に短く外反する口縁部をもつもので、多分に弥生前期の甕に近似している。総じてみれば、A種の深鉢は新旧タイプの雑多な形式が共存している、といえるだろう。

浅鉢は口縁部が屈曲して内傾するa類(11~13)のみ検出している。11は口縁部がやや深く、波状を呈し、13は内縁に1条の沈線文を施している。

底部では、14が深鉢、15が浅鉢とおもわれる。

B種もほとんどが小破片で、完好な資料はみられない。分類はA種に準じている。

深鉢はいずれもa類で、b・c類は認められない。a類は突帯上に刻目をほどこすa₁類(16~18)が目立ち、a₂類(19)は少ない。刻目はO字・D字・V字があるが、大体においてA種のそれより小さく、18などは極めて浅く微細なものになっている。また体部片にみられる突帯にも刻目をもつもの(20)ともたないもの(21・22)がある。なおB群の資料中には屈曲部をもつ体部片は1点のみみられないことからすると、本群の深鉢はa類のみの単純な組成で、しかもその大半は2条突帯をもつものであったとおもわれる。

浅鉢は検出されなかった。

	A 種		B 種	
	深鉢	浅鉢	深鉢	浅鉢
口縁部	8	6	4	
体部	92		34	
底部	2		1	
小計	102	6	39	
合計	108(73.5%)		39(26.5%)	

表1 宮田遺跡A地点

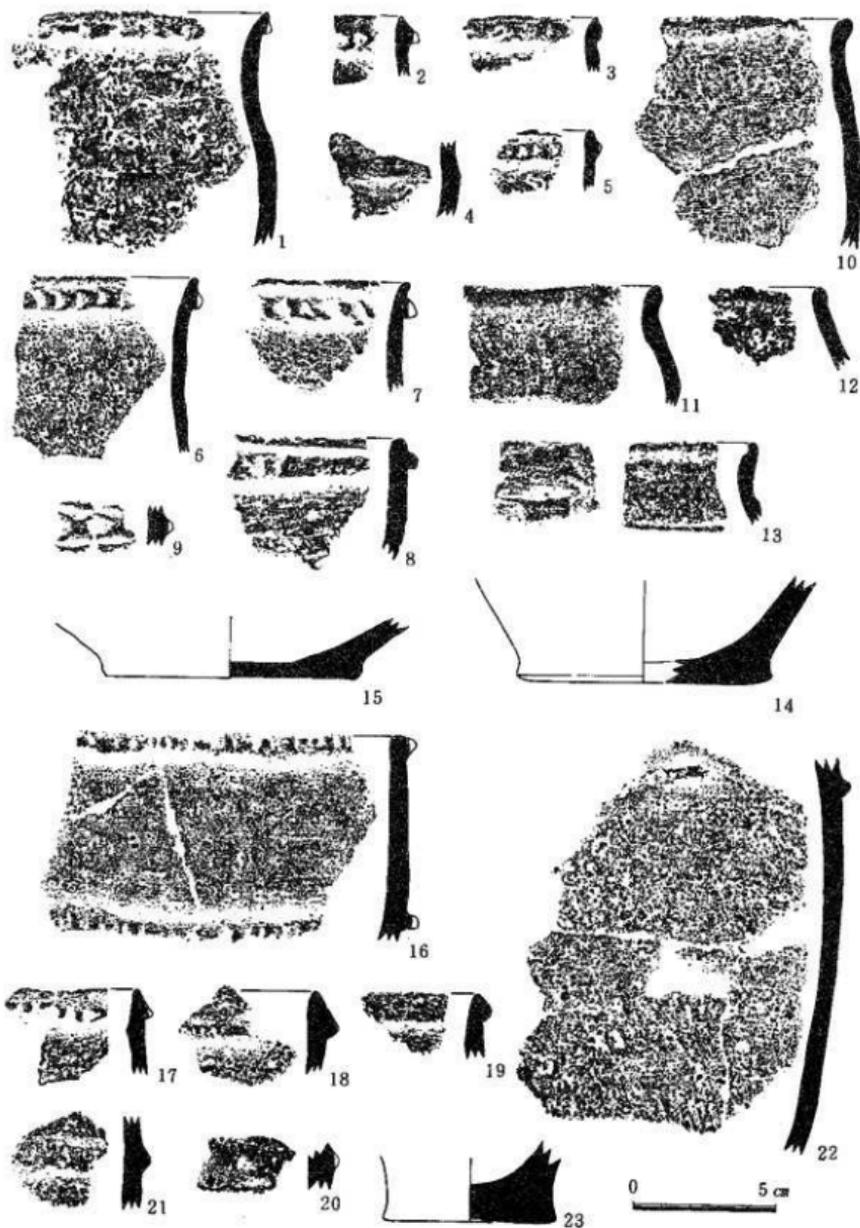


图4. 宮田遺跡A地点〔A種〕(1~15)〔B種〕(16~23)

底部は1点のみ検出している。23は中央部がわずかに凹んだ厚みのある平底で、深鉢とみられる。

以上の観察からすると、B種は河内地方で設定されている晩期最終末の長原式の一群と判断され、A種はそれに伴う併行期の資料ということができよう。

B地点では落ち込みの上・下層から後期の資料が出土している。下層は北白川上層式3期(新相)の一括品(I群土器)で、上層は宮滝式(II群土器)である。B地点出土資料の詳細は『概要』(森田1969)に譲るとして、ここではそれぞれの層から出土している生駒西麓産の土器について簡単に触れておきたい。I群土器では、泉氏の分類(泉1981)を基本にすると、深鉢A'・BないしC・D・G・鉢B・浅鉢Aなどがみられ、そのうち深鉢B・G・浅鉢Aなどに生駒西麓産土器が認められる。また総土器片数約350点のなかの半数ちかくが生駒西麓産であった。II群土器はほぼ全形が復元できる鉢と浅鉢の2点のみの検出であるが、いずれも生駒西麓産であることは興味深い。

安満遺跡(図版第10・11-a)

高槻市八丁塚町ほかに所在する。遺跡は旧檜尾川が形成した小規模な扇状地上に立地し、弥生時代から中世にかけての集落が断続的に展開している。縄文時代の遺構としては、扇中央部のN5地区で検出した晩期の自然流路(高槻市1974)くらいで、その他には顕著な遺構を検出してない。縄文土器は上記の自然流路から出土したもの以外では、9地区の包含層や45地区の弥生時代の用水路から若干量が出土しており、あわせて報告しておきたい。

9地区では、後期の土器片を3点検出している(図5)。いずれも弥生時代の包含層や遺構埋土から検出したものである。1は深鉢の口頸部片で、外面に沈線を数条ほどこしたのち、要所に蛇行文を刻み付けている。胎土には長石粒が目立ち、色調は淡灰褐色を呈している。2は深鉢の体部片で、外面に1条の沈線とRLの縄文をほどこしている。胎土は精良で、暗灰灰色を呈している。3は浅鉢の口縁部片で、外面に数条の太い沈線



図5. 安満遺跡 9地区(1~3) N5地区(4)

がみられる。胎土はやや砂質で、灰褐色を呈している。これら3点はおおむね北白川上層式3期の所産と考えられる。

N5地区では、4条ばかり検出した自然流路(A溝～D溝)のうちのC溝およびD溝の埋積土から晩期の土器が相当量出土している。

図5に示した4はD溝から出土した浅鉢の口縁部片で、一旦短く内折したのも大きく外反する形態のものである。内外面とも丁寧なヘラミガキをほどこしており、屈曲部に横長の押圧痕がみられる。晩期前半のものであろう。

図6・7の資料は、35がC溝出土品で、ほかはすべてD溝から出土したものである。深鉢・浅鉢があり、深鉢には生駒西麓産のものもかなり含まれている(表2)。以下では、これらを宮田遺跡A地点の形式分類に準じつつ、在地産を主とするA種と生駒西麓産のB種に分けて記述していく。

	A 種		B 種	
	深鉢	浅鉢	深鉢	浅鉢
口縁部	13	9	4	
体部	122		18	
底部	4		1	
小計	139	9	23	
合計	148(86.5%)		23(13.5%)	

表2 安満遺跡N5地区

総じてA種の深鉢は頸肩部が屈曲せずになめらかに移行し、内傾気味に立ち上がる口縁部は上縁をわずかに外反さすものが多い。また口縁部の内外面をナデ調整し、体部の突帯以下をヘラケズリするのが普通で、胎土には砂粒をかなり含んでいる。色調は全般的に暗灰色ないし暗茶灰色系統のものが多く、煤の付着も顕著にみられる。

これらのなかでは1～10がa類であるが、9・10については突帯が斜がれていて、刻目の有無は不明である。のこりの8点のうち4点がa₁類で、それぞれにD字(1)・小D字(2・4)・小O字(3)の刻目がみられる。なお4の刻目は布巻棒によっている。b類は3点と少ないが、いずれもb₁類で横長D字(11)・D字(12)・小D字(13)の刻目をもっている。ただしb類といっても、11のように突帯が部分的に上縁に接しているものもあり、遺存する部位によってa類かb類か判断に迷うものもある。14～18は突帯の付いた体部片である。突帯の断面形は整った三角形のもの以外に、突出したもの(14)や低平なもの(18)が混じっている。また刻目の有無が判然としない16を除いたすべてのものに刻目がみられる。刻目にはO字やD字がみられるが、小さなものが多い。

浅鉢には口頸部が屈曲して内傾するa類(19・20)、碗状を呈するb類(21～24)および口頸部が大きく外反するc類(25)がみられる。a類には平縁の19と波状口縁の20があり、b類でも波状口縁(21)・刻目文(22)・沈線文(23)などの形態や文様がみられるほか、上

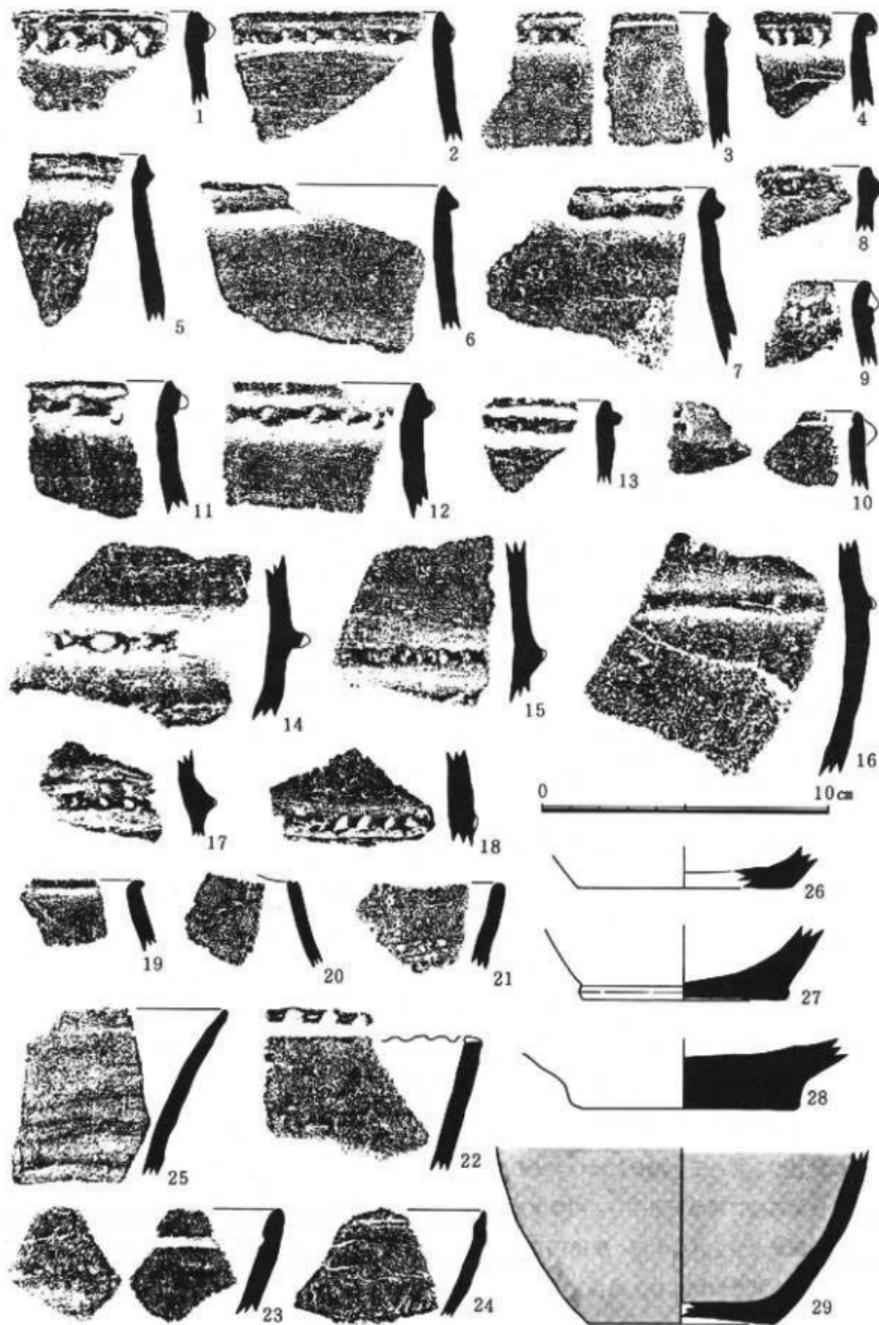


图6. 安尚遗址N5地区【A種】(1~29)

縁部を薄く仕上げるもの(24)などがあり、バラエティに富んでいる。c類の25は黒色でよく研磨された薄手のものである。

そのほかに若干の底部がある。26・27は深鉢と考えられるが、28については煤が付着するものの、壺の底部かも知れない。なお28の外面には、靱の圧痕が明瞭に印されている(図版第14-b)。また29は鉢の底部とみられるが、内外面および破断面にべっとりと黒い漆が付着しているのが観察(図版第14-b)され、鉢の破損後にも当該品が漆用の容器として二次使用されていたことがうかがえる。

B種では、深鉢の口縁部片が4点出土していて、すべてa類に属している⁹⁾。そのなかで刻目をもつa₁類が3点あり、いずれもV字(30)・小O字(31・32)といった小さなものである。ほかに刻目を付さないa₂類が1点(33)ある。34は突帯のある胴部片で、刻目はやはり小D字である。35は深鉢の底部片で、底裏中央部がわずかに凹んでいる。内面がナデ調整で、外面は底部ちかくまでヘラケズリがみられる。B類の深鉢はa類の口縁部形態と2条突帯をもつ形式が大勢を占めると考えられるが、32のような形態のものは胴部の突帯を欠いているかもしれない。

浅鉢については、検出していない。

上記の観察からすると、B種は晩期終末の長原式の資料と判断される。

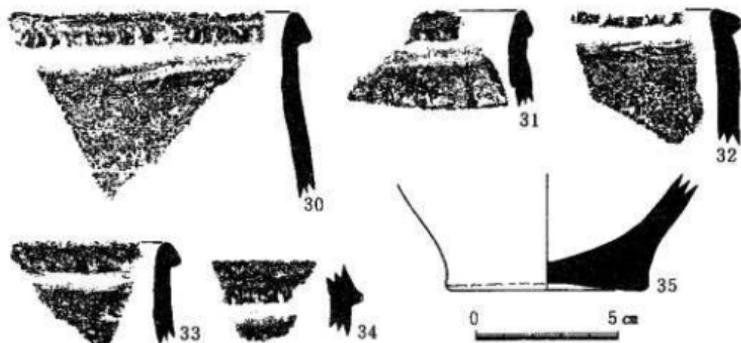


図7. 安曇遺跡N5地区(B種)(30~35)

45地区は遺跡の南辺中央部にあたるところで、弥生前期の用水路中から若干の突帯文土器が出土している(図8)。この用水路には井堰が設けられており、これらの資料は井堰下流側の溝底から弥生土器(前期[中段階])とともに検出されたものである(森田1981)。N5地区のD溝と同様に、A種とB種にわけて記述する。

A種には、深鉢a類(1)・b類(2)の口縁部がそれぞれ1点ずつ認められる。1の突帯は断面がカマボコ状なのに対し、2のそれはシャープな三角形で鋭く突出している。また刻目は1が小O字で、2が微細なO字(幅が2mm以内)である。胎土は小石粒を多く含み、色調は暗灰色ないし淡茶灰色を呈している。



図8. 安海遺跡45地区(A種)(1・2)(B種)(3・4)

B種も2点の深鉢が得られている。a類が1点(3)とb類が1点(4)である。3の外表面には縦方向の刷毛目が観察され、内面は刷毛調整後になっていて、4は外面がナデ調整で、内面にはヘラケズリがみられる。突帯はどちらも細身で、シャープに突出している。刻目については、3にごく微細なV字(幅1mm強)が3点1組でまばらにほどこされている程度であり、4にはみられない。2点とも長原式とは趣が異なり、後出の様相もっている。いずれも胎土は角閃石を含み、精良で堅緻。色調は暗茶褐色を呈している。

耳原遺跡(図版第11-d)

耳原遺跡は茨木市のほぼ中央部に位置し、南流する茨木川と安威川にはさまれた舌状台地の上面に立地している。台地上ではかなり以前から遺物が採集されていたが、昭和54年にはじめて本格的な調査がおこなわれ、縄文時代晩期の甕棺墓群・弥生時代前期～中期の土坑群・竪穴式住居などが検出されている(奥井ほか1892)。とりわけ15基の甕棺からなる墓群は、縄文時代の遺構としては三島地方でははじめてのまとまった資料であり、澁賀里Ⅲ式期から長原式期まで営まれていたことが判明している。なお、この甕棺墓群は現在も断続的に調査がおこなわれており、その評価は今後の整理作業が完了するのをまって

	A 種		B 種	
	深鉢	浅鉢	深鉢	浅鉢
口縁部	2		5	
体部	28	1	96	
底部	1		3	
小計	31	1	104	
合計	32(23.5%)		104(76.5%)	

表3 耳原遺跡N地点

果たすべきものであろう。したがって、これら発掘の資料はひとまず割愛することとし、今回は耳原遺跡の北半部(N地点)でおこなわれた整地工事の際に得られた晩期終末の資料⁹を呈示しておきたい(図9)。土器片はいずれも小片ないし細片である。表3に掲げた数値は接合作業をおえたのちに、1cm四方以上の破片について数えたもので、在地産を主とするA種と生駒西麓産のB種とに分記している。

A種は深鉢と浅鉢があるが資料数は少なく、4点を図示するのみである。1は深鉢の口縁部片で、a₁類に属す。胎土には砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。2も深鉢の口縁部片でB₁類に属すが、上端部に面をもち刻目を有することと突帯の位置がこの時期のものとしてはややかけ離れたところに付されている。胎土には小石粒を含み、淡褐色を呈する。3は浅鉢の体部片である。内面は平滑に仕上げられていて、赤色顔料を塗布している。破片の形状からすると碗形を呈する浅鉢にならう。胎土はやや粗く、黒褐色を呈している。4は深鉢の底部片だが、風化が進んでいて調整は不明。胎土は砂質で、淡茶褐色を呈する。

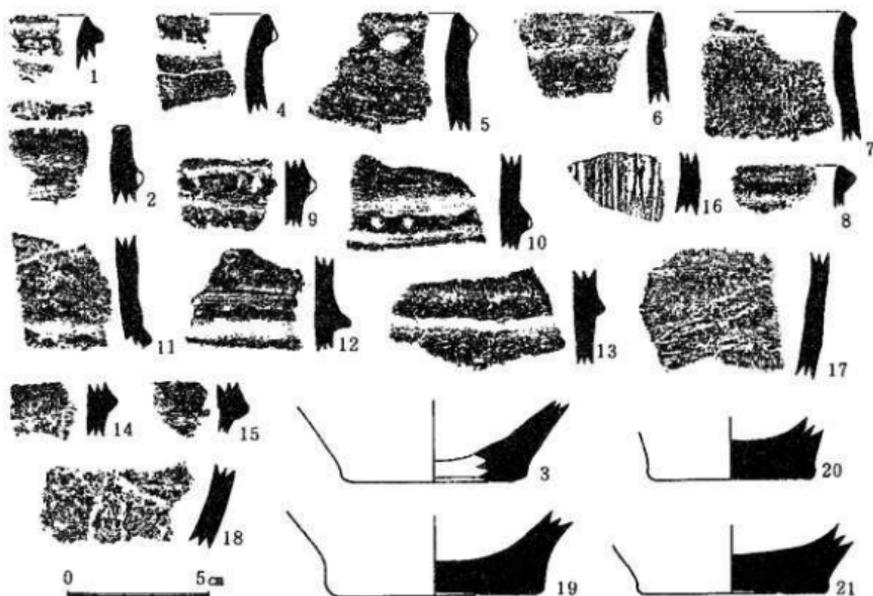


図9. 耳原遺跡N地点〔A種〕(1~3),〔B種〕(4~21)

B種はこの一括資料の主体を占めるものであり、すべてが深鉢片である。

深鉢の口縁部片はいずれもa類で、内訳はa₁類が3点、a₂類が2点である。a₁類の刻目はV字(5)とO字(6・7)がある。突帯を付した体部片が7点みられるが、刻目を付すものは少なく、あってもV字(10)・O字(11)の刻目がまばらにほどこされている程度である。器面の調整が頸部をナデ調整し、体部下半をヘラケズリするのが大半で、なかには17・18のように縦や横方向の条痕が認められるものもある。底部(19~21)はいずれも深鉢であろう。

B種の資料は胎土に多くの角閃石を含んでおり、色調はおおむね茶褐色ないし暗茶褐色を呈している。

当該資料は長原式(B種)とその併行型式(A種)となるが、長原式の占める割合が76.5%という高率を示すのが際立った特色となる。

郡家川西遺跡(図版第12・13a)

高槻市清福寺町ほかに所在する。遺跡は芥川右岸の低位段丘上であって、旧石器時代～中世にいたるまでの遺構が約60haの範囲に展開している。これまでの調査では、縄文時代後・晩期の土器片をはじめとして、有舌尖頭器・石鎌・石剣などが散発的に出土するだけで、明確な遺構は検出していない。ただ最近、遺跡北端部の6-E・F地区の調査(橋本1989)で、C区包含層から比較的まとまった晩期の資料を検出している。ここではこれらを図示するとともに、その他の若干のものについても報告しておく。

図10は6-E・F地区出土の一群で、地元産を主とするA種土器と生駒西麓産のB種土器とにわけて記述する(表4)。

A種には、深鉢・浅鉢・注口土器がある。

深鉢には、有文のもの(1)が1点みられるほかは、無文のもの(2~8)である。1は口縁部の外面に2条、内面に1条の沈線をほどこし、器面はナデ調整している。2・9は幅ひろくつた頸部を二枚貝で調整している。3~5は口縁部が単純に外反する部類で、器面は条痕ないしナデ調整するが、3のみは巻貝によっている。6と7・8は口縁部が内湾して立ち上がるものだが、器壁厚および口縁部調整の

	A 種			B 種	
	深鉢	浅鉢	注口器	深鉢	浅鉢
口縁部	10	7			
体部	108		1	28	
底部	7			4	
小計	125	7	1	32	
合計	133(80.6%)			32(19.4%)	

表4 郡家川西遺跡6-E・F地区

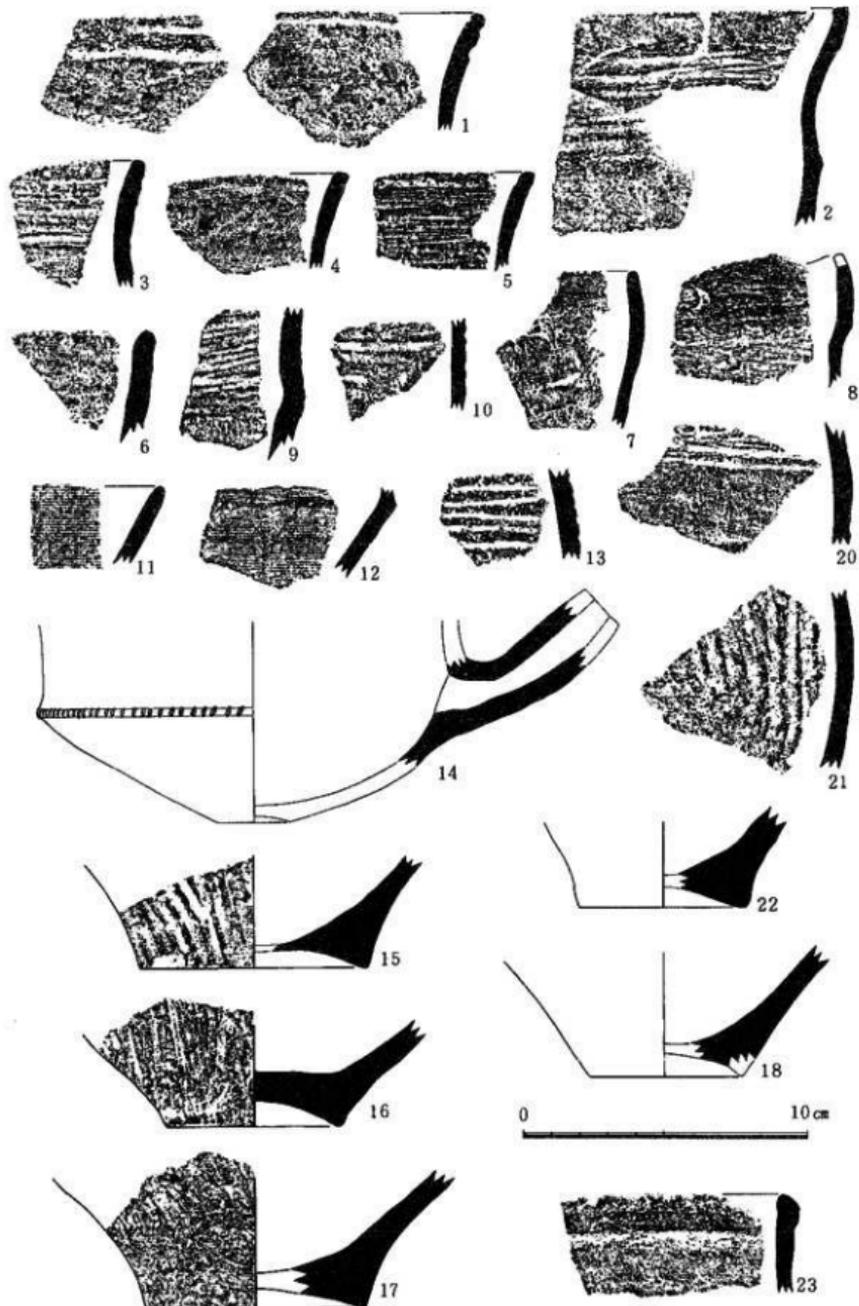


图10. 郡家川西遺跡6-E·F地区(A種)(1~18·23)(B種)(20~22)

精粗に顕著な差がある。なお波状口縁の8の内面には鼠の嚙痕とみられるものが観察される。また体部外面の調整は、二枚貝による条痕と(10)と板状工具によるケズリとがみられるが、量的には2:1程度の割合で前者が多い。

浅鉢には良好な資料が乏しく、形式別に数例の口縁部片を図示する。11は内湾気味に外傾するもの、12は一旦短く立ち上がったのち大きく外反するもの、13は碗状を呈するもので沈線をめぐらしている。いずれもヘラミガキで丁寧に仕上げている。

注口土器(14)は注口部のみの検出で、本体の形状はほとんどわからないが、頸胴部間の屈曲部にはV字の刻目が密にほどこされている。

そのほか若干の底部片がある。すべて凹底で、15・16などは底裏中央部に剝離痕が認められる。体部下半の外面調整は二枚貝によるもの(15・16)とケズリによるもの(17~19)がみられるが、内面はいずれもナデ調整している。

A種の胎土は全般的に砂粒を多く含んでおり、色調は、1が黒灰色を呈するほかは、おおむね灰褐色ないし明褐色を呈している。

B種では深鉢片のみ検出している。20は体部上半、21は体部下半の破片で、それぞれに横方向と縦方向の二枚貝による条痕がみられる。22は底部片で、凹底の中央部に剝離痕が観察される。これら一群の土器は澁賀里Ⅲ式に近い内容をもっているが、澁賀里遺跡の深鉢の体部片調整はヘラケズリが圧倒的なのに対し、当該資料のそれは二枚貝調整が目立っている。どちらかといえば馬場川遺跡(原田ほか1981)の様相にちかく、澁賀里Ⅲa式(家根1981)に該当するものであろう。

なお上記の一群と同じ包含層から新相の深鉢が1点出土している。23は口縁部上端に接して断面カマボコ状の突帯を付したもので、突帯には刻目はない。器面の調整は風化のため不詳。胎土には砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈している。形態からは長原式併行期のものともみられるが、胎土の質は当該期の他の遺跡の資料とは様相が異なる。むしろ澁賀里遺跡でⅣ式とされているもの(田辺ほか1973(A256))にちかい。

つぎに郡家川西遺跡の他地区で出土した若干の資料についてみる。

図11の1は7-A・B地区で検出した鉢の上半部の破片で、外上方へ短くのびた口縁部は端部に面をもつ。体部外面には巻貝条痕がみられ、頸部に3条の凹線をほどこしている。宮滝式ないし澁賀里Ⅰ式であろう。胎土には角閃石の細粒が多く含まれ、茶褐色を呈している。生駒西麓産。同じく2は7-C・G地区で出土した深鉢の体部片で、突帯を付している。刻目は小O字である。外面は突帯以下をヘラケズリし、内面はナデ調整している。突帯部の断面の形状から、長原式と判断される。胎土に角閃石を含み、暗

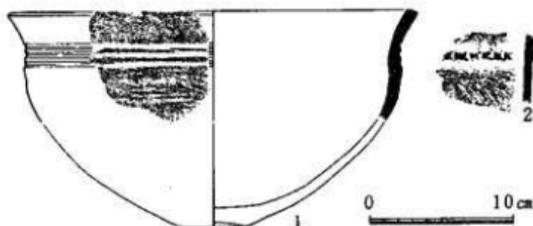


図11. 郡家川西遺跡 7-A・B地区(1), 7-C・G区(2)

茶褐色を呈している。生駒西麓産。

またこのほかにも、17-P・18-M地区でも長原式の深鉢片が出土している。

塚穴遺跡(図版第13-a)

遺跡は南平台丘陵東縁部の奥まったところに位置し、すぐ東側には芥川が南流している。縄文土器は昭和62年の塚穴古墳群の調査時に、4号墳の石室(3・4・6)や3号墳(5)の周濠の埋積土から出土したものである(図12)。

3は波状口縁をもつ深鉢の口縁部片で、粗い縄文をほどこしたのち、口縁に沿って細い粘土帯を付した上に爪形文をめぐらしている。内縁には粘土帯の割れた痕があり、

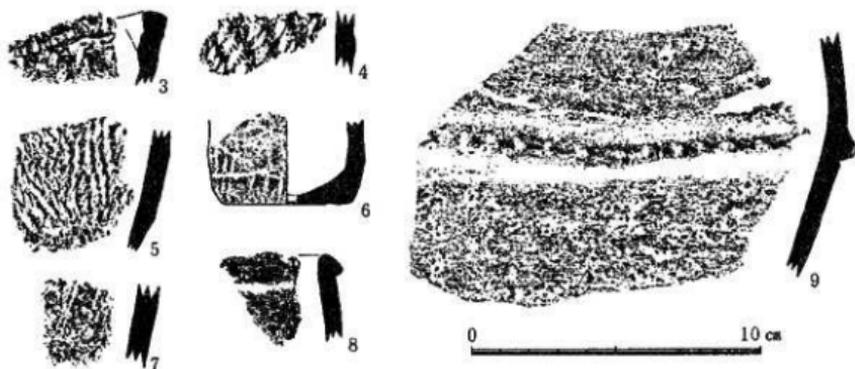


図12. 塚穴遺跡(3~6), 天神山遺跡(7・8), 塚原遺跡(9)

もとは波頂部付近を内側に肥厚させていたとみられる。船元I式B類であろう。胎土は精良で、明淡褐色を呈している。4は深鉢の体部片で、太くて鮮明なRLの縄文をほどこしている。胎土・色調は1と同じで、同一個体の可能性がある。5は深鉢の体部片で、外面に縦走する縄文がみられる。胎土は精良で、灰褐色を呈している。船元I式～II式のものとおもわれる。6は径5cm弱の平底の破片で、外面には底部に達するまでの垂下条線が幾本もみられ、底部ちかくには横走する沈線が1本ほどこされている。胎土には角閃石を含み、茶褐色を呈している。生駒西麓産。北白川上層式の所産であろうか。

天神山遺跡(図版第13-a)

天神山丘陵の一带に展開する弥生時代の集落跡で、遺跡内の南東部に昼神車塚古墳が所在している。縄文土器は昭和53年の昼神車塚古墳の調査時に、南北溝から出土したものである(図12)。

7は深鉢の小片で、外面に粗い縄文とともに条線らしきものがみられる。胎土は砂粒を含み、やや軟質である。色調は淡茶褐色を呈している。船元式か。8は深鉢の口縁部片で、上端に接して突帯が付けられている。胎土に角閃石を含み、茶褐色を呈している。長原式であろう。

塚原遺跡(図版第13-a)

遺跡は、阿武山南麓に展開する塚原古墳群の南西部の一画にあって、安威川左岸の段丘上に営まれた弥生時代の集落跡である。縄文土器は弥生時代の包含層から出土している(図12)。

9は深鉢の体部片である。肩部に突帯が付され、小D字の刻目が施されている。頸部はナデ調整し、体部はヘラケズリしている。胎土に角閃石を多く含み、暗茶褐色を呈している。生駒西麓産で、長原式に属す。

東奈良遺跡(図版第13-a)

茨木市東奈良三丁目ほかに所在する。遺跡は旧茨木川右岸の沖積地にあって、約70haの範囲に弥生時代から古墳時代にかけての大集落がひろがっている。縄文土器としては、わずかに弥生時代の遺構や包含層から数点の破片が検出されているにすぎない(図13)。

G-8地区の弥生時代の包含層からは前期の深鉢片が出土している。10は口縁部片で、RLの縄文地に低平な突帯を張り付けたのち、先端を加工した竹管でC字形爪形文を施

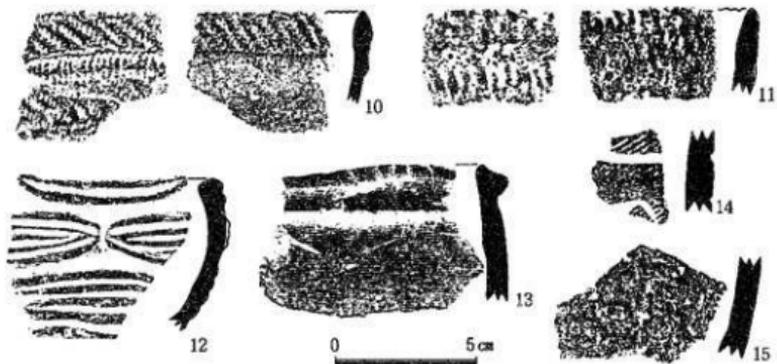


図 13. 東奈良遺跡(10~13), 初田遺跡(14・15)

している。内面にも口縁に沿ってRLの縄文帯を巡らしている。11はかなり風化しているが、外面に粗く刻んだ(C字)爪形文が観察され、口縁端部には刻目、内縁には縄文帯がみられる。どちらも胎土には砂粒や小石粒が多く含まれており、色調は暗茶灰褐色を呈している。大蔵山式であろう。

またII-A区の弥生前期の溝28から鉢片、同じく溝25上層から深鉢片が出土している。12は山形突起をなす鉢の口縁部片で、沈線文帯の上方に浮線文が描かれている。胎土は精良で、灰白色を呈している。大洞AないしA'式に併行する浮線文土器とされている(石川1985)。13は口縁部上端に接して突帯を付けたもので、突帯は上面のみを口縁とともにナデつけている。器面は内外面ともナデ調整している。胎土は砂粒を多く含み、暗茶灰色を呈している。形態的には突帯文土器の系譜に属すが、胎土や器面調整は弥生土器と変わらない。なお13は弥生土器の伴出品とすべきものであるが、12については混入品とみなされる。

初田遺跡

茨木市初田に所在する。遺跡は安威川左岸の丘陵上に位置し、標高は約60mである。縄文土器を出土する遺跡としては三島でもっとも高いところにある。縄文土器は初田古墳群の調査時に30点余の資料が検出されている。そのなかの一部を紹介しておく(図13)。

14は縄文地に沈曲線を描いたもので、小片のため型式比定は難しい。他の公表資料

〔表木市1973〕を参考にすれば、後期前半に属す可能性が高い。胎土は精良で、淡茶褐色を呈している。15は深鉢の体部片で、胎土に角閃石を含み、色調は暗茶褐色を呈している。生駒西麓産。

なおこの遺跡からは突帯文土器も出土しているが詳細は不明である。

牟礼遺跡(図版第13-b)

表木市中津町に所在する。遺跡は安威川右岸の沖積地にあり、標高は約6mである。昭和60年に自然流路・井堰・水田などが検出〔表木市1985〕され、自然流路の埋土から若干の晩期縄文土器(図14)が出土している〔宮脇1986〕。

1は深鉢の口頸部片で、口縁直下に1条の刻目突帯を付し、端部にも刻目を施している。頸部はナデ調整し、胴部は左方向へ削り調整している。胎土はわずかに小石粒を含むも精良で、淡茶褐色を呈している。2ははかなり大形の深鉢片で、口縁部直下に断面三角形の低平な刻目突帯を付している。頸部は横方向にナデ調整し、胴部はヘラケズリしている。胎土は極めて良質で角閃石を多く含み、暗茶褐色を呈す。焼成は堅緻。3も深鉢の口縁部片で、口縁に沿って刻目突帯がめぐらされている。頸部はナデ調整し、胴部はヘラケズリしているが、ケズリが弱くて、頸部から胴部への移行はなだらかである。外面には煤やふきこぼれが顕著にみられる。胎土には粗砂を含み、茶黒色を呈している。4は黒色磨研の浅鉢の口縁部片で、上縁部にわずかな面をもつ。胎土は角閃石を含んだ精良なもので、暗褐色を呈している。5は凹底の破片で、体部外面を削り調整し、凹み部中央には使用痕とみられる剝落面がある。胎土は角閃石を含み、暗茶褐色を呈している。6は粘土円盤を使用した平底で、体部外面は粗く削り調整している。胎土には大粒でしかも多量の角閃石を含んでおり、色調も暗茶褐色を呈している。7は球形の体部から太く直立する頸部をもつ小型壺で、口縁部を欠いている。底部は中央がわずかに凹んだ平底で、胴部との境は曲折している。器壁はナデ調整しており、胴部に指紋とおもわれる圧痕や一部に煤の付着が認められる。また頸・胴部内面には粘土紐の接合痕が明瞭に看取される。胎土は角閃石を含み、茶褐色を呈している。なお、2・4～7は胎土・色調から生駒西麓産のものと同判断される。

これら自然流路出土の土器は、すべて晩期の所産となるが、詳しくみれば遊賀里Ⅲ式(5)・同Ⅲ～Ⅳ式(4)・同Ⅳ式(1～3)・船橋式もしくは長原式(6・7)となり、資料が少ない割には型式差が大きいといえよう。したがって縄文土器自体からは、自然流路に架構された井堰の所属時期を明確に指摘しがたい、というのが実状である。ただ最近、

滋賀里Ⅳ式～Ⅴ式への移行のなかで口酒井期が提唱(泉1986)されたのをうけて、器種構成や深鉢の突帯の変化などから第1段階～第3段階の変遷(磯岡1988)が考定されており、1条突帯と2条突帯あるいは丸底と平底の共存などが積極的に認められている。しかしこの口酒井期をもってしても、当該資料のすべてを包括することはできないだろう。

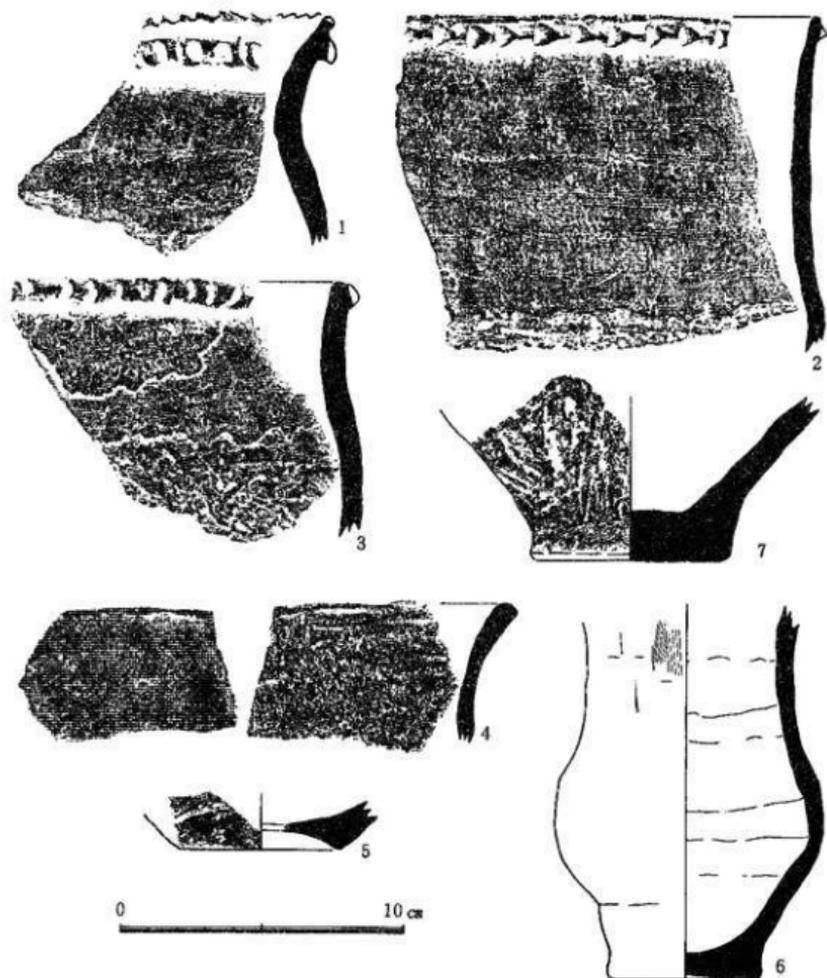


図14. 牟礼遺跡(1～8)

2. 時期別の概要

以上が三島地方の縄文土器の主なものであるが、いずれの資料も徹々たるもので、しかも散発的な出土であり、土器の系統的な変遷や器種構成の変化などの議論を展開するには極めて不十分な状態にある。ここではとりあえず時期別に概要を記し、そこから派生するいくつかの問題点や見通しについて簡単に述べてみたい。なお土器を観察する中で、かなりの生駒西麓産^⑧のものを認めたことから、それらの搬入状況についても触れておく。一覧表(表5)の中でゴチック体で記したものは、その型式に生駒西麓産土器が含まれていることを示している^⑨。また三島における長原式土器のあり方についても少し詳しくみておきたい。

1) 早期～後期

早期では淀川縁にある大塚遺跡で採集された末葉の条底土器(深鉢)が唯一であるが、断片資料のため細かな時期比定はできていない。大阪府下での早期の資料としては生駒西麓産・枚方台地・豊能地方の丘陵部などによくみられる押型文土器が目立った存在であるが、三島地方ではいまのところ皆無である。ただ大塚遺跡の対岸にある枚方市磯島先遺跡の資料のなかに押型文土器があり、また芥川と安威川に挟まれた地域の段丘上や丘陵部でこれまでにサヌカイトやチャート製の有舌尖頭器が5点ばかり集中的に発見されている(図15)ことからすると、今後この地域で押型文土器が発見される可能性は高い

遺跡名	早 期	前 期	中 期	後 期	晩 期	立 地	標高(m)	タイプ
大 塚	東海系条底土器	北白川上層1・0・目		北白川上層3期～兼中区	長原	自然堤防	1～3	A
桂 本		北白川下層II・0・目	船元II・吹積	北白川上層1・2・3期 一乗寺区・元住吉山II・宮渡	高麗原1・0	自然堤防	0～2	A
宮 田				北白川上層3期(新)・宮渡	長原	低位段丘	18～20	B
安 瀬				北白川上層3期	高麗原・長原	扇状地	18～20	B
耳 原					高麗原II・船岡・長原	低位段丘	21～23	B
藤原川西				宮渡	高麗原II a・長原	低位段丘	15～18	B
塚 元			船元II	北白川上層1～2期		丘陵縁辺	43～45	C
天神山			船元		長原	丘陵縁辺	20～25	B
塚 原					長原	台地	50～60	C
東 宮 原		大塚山式			浮城文土器	沖積地	6～8	B
初 田				+	+	台地	60～63	C
牟 礼					高麗原II・II 船岡・長原	沖積地	5～7	B
西 宮 井			+	+		丘陵縁辺	35～40	B
太 田				+		沖積地	15～20	B

表5 三島地方の縄文土器型式別一覧(ゴチック体は資料中に生駒西麓産土器を含んでいる)

ものとおもわれる⁹⁰。

前期では北白川下層式と大歳山式の資料が若干得られている。このうち北白川下層式は大塚遺跡と柱本遺跡で出土していて、I～III式が認められる。とくに大塚遺跡では各型式に生駒西麓産の土器が含まれている。この2遺跡はともに淀川北岸の自然堤防上に立地する集落遺跡とおもわれるが、実態はわからない。大歳山式は神積地にある東奈良遺跡で生駒西麓産のものがわずかにみられる。三島以外の北摂では能瀬町中筋遺跡と箕面市瀬川遺跡がそれぞれの地域での拠点的な集落とみなされている。中筋遺跡〔渡辺1981〕では北白川下層II式を中心として1500点以上の土器片が出土しており、瀬川遺跡〔飯島1986〕でも北白川下層II式および大歳山式が採集されている。これらの遺跡で得られた北白川下層式にはかなりの割合で生駒西麓産のものが含まれていて⁹¹、大塚・柱本遺跡での前期土器の在り方もこのようなものと推量される。

中期の資料はさらに少ない。柱本・塚穴・天神山の各遺跡で船元I～II式の小片がみられるのと柱本遺跡から発見されている後葉期の咲畑式土器が希少品として特筆される程度で、地元産の上器は皆無。また生駒西麓産のものもなく、いずれも遠隔地からの搬入品と認められるものである。近隣の遺跡においても、中期の遺物が比較的多く出土している豊中市野畑春日町遺跡〔山元ほか1987〕・大阪市森の宮遺跡〔松尾1978〕・四條畷市砂遺跡などでも当該期の前半の資料は船元式土器が主体的である。筆者が知るところでは船元I・II式に生駒西麓産土器が伴っているのは四條畷市南山下遺跡〔野島1983〕くらいで、これまでに摂津での検出例は聞いていない。中期全般を通じて生駒山西麓部での土器作りがなんらかの事由で減退していたことがうかがえる。

後期では9ヶ所の遺跡で中葉から末葉にかけてのものを中心に検出しており、中期までの遺跡数が数ヶ所ずつであったことと比べれば急増したと言えよう。ただ北白川上層式1期以降の型式をいくつも継続して保有しているのは柱本遺跡くらいで、大半の遺跡は1～2型式にとどまっている。最多の型式は北白川上層式3期と宮滝式だが、遺物量は宮田遺跡の遺構(落ち込み)出土資料約350点を背景とする前者が圧倒的に多い。生駒西麓産土器は北白川上層式1～3期・元住吉山II式・宮滝式に伴っており、後期の型式として確認したなかでは一乗寺K式にみられなかっただけである。とくに北白川上層式3期の宮田遺跡のB地点〔森田1989〕では、破片約350点の半数ちかくがそれに該当し、他の型式でも出土点数が数点であるにもかかわらず生駒西麓産が認められるなど、相当量の土器が普遍的に搬入されていたとみてよい。

2) 晩 期

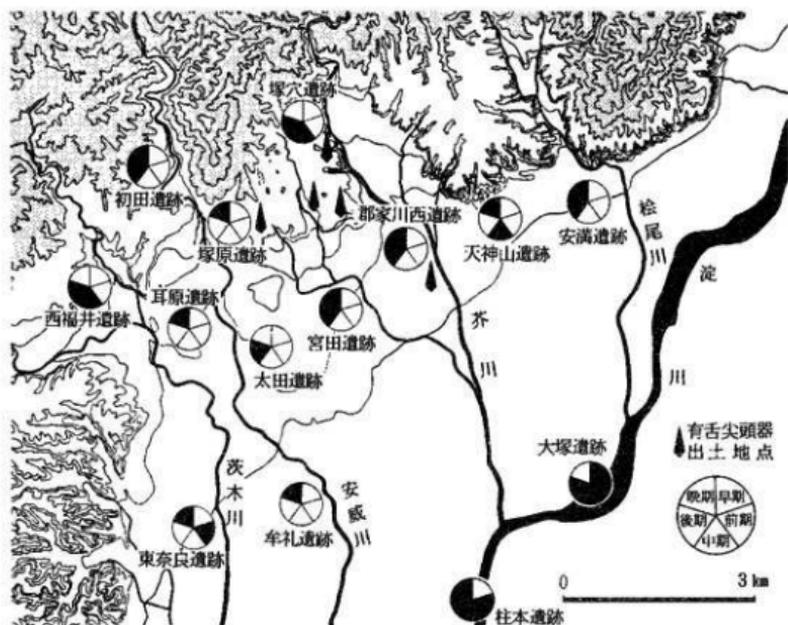


図 15. 三島地方の縄文土器出土遺跡

晩期では前葉の資料が柱本遺跡などでまれにしかみられないのに対し、中葉以降は遺跡数も漸増して、長原式期には8遺跡を数えるなど資料数も格段に多くなっている。また生駒西麓産の土器は中葉以降の滋賀里Ⅲ・同Ⅳ・船橋・長原のすべての型式で認められていて、比較的まとまった資料としては郡家川西遺跡6-E・F地区(滋賀里Ⅲa式)、宮田遺跡A地点(長原式)、安満遺跡N5地区(長原式)、耳原遺跡N地点(長原式)などがある。あらためて総出土点数に占めるそれぞれの割合を示せば、郡家川西遺跡では19.4%、宮田遺跡では26.5%、安満遺跡では13.5%となり、耳原遺跡ではじつに76.5%が生駒西麓産であった。これらは20%前後の比率を示す前者と過半数をはるかに超える後者との2群に大別されるようである。西摂にもこれとよく似た統計処理をほどこした資料がある。前者に類するものとしては口酒井遺跡(滋賀里Ⅳ～Ⅴ式)(後岡1988)で24.1%(3次～10次の合計)・15.4%(6次のみ)、野畑春日町遺跡で10～20%(山元ほか1988)などがあげられ、やはり20%前後という数字が晩期における平均的な搬入率とみられる。しか

し、片方では口酒井遺跡(11次調査)(南はか1988B)の60~70%(総破片数では64.3%〔筆者算出〕)という資料があって、三島における耳原遺跡と同様に、過半数を超えている遺跡(ないし遺構)がわずかながら存在しているのが実態のようである。

そこでいま少し考察をすすめるために、胎土の種別と深鉢の突帯位置とを対比してみた(表6)。いずれも資料数は多くないが、複数の遺跡でよく似た結果が得られているので、大方の傾向はうかがえる。①~④は弥生土器の伴出が明確でなく、⑤・⑥はそれぞれ弥生時代前期の溝から検出した資料である。このなかで地元産を主とするA種では、突帯が口縁部に沿ってほどこされたa類が60%、口縁部からややさがったところほどこされたb類が40%となり、およそ3~4割の比率でb類が含まれていることが予測される。これに対して生駒西麓産のB種では、資料⑤の1点のb類以外はすべてa類で占められており、顕著な違いが指摘できる。それも資料⑤のB種は観察原稿でも述べているように、突帯や刻目の形状から後出の要素をもち、同じく資料⑥も厳密な意味では長原式併行期のものとは呼べないことから、これらの資料を除外して算出すると、A種ではa類が63.6%、b類が36.4%、B種ではa類が100%となり、A種とB種のもつ形式的特性の違いが一層明らかになる。すなわち搬入品である深鉢のB種がa類土器にはほぼ限定されているのに対して、A種にはあらたにB種a類を模倣したものを生み出す一方で、旧来の手法・形態を保持したb類が作り続けられていたと予見しうるのである。

そもそも長原式はマクロ的には「船橋式の系譜を引きつつ夜白II式の影響のもとに成立した」型式(家根1981:1982)であるが、ミクロ的には河内地域で設定されたものであり、その標識遺跡である長原遺跡でも提示された資料の85.5%が河内産(生駒西麓産)であっ

	A 種		B 種		備 考	
	a 類	b 類	a 類	b 類		
①宮田遺跡 A地点	3	4	4	0	た。長原遺跡における非生駒西麓産土器の意味合いについてはまだ充分論議されていないが、少なくとも三島のような河内の周辺地域にあっては、河内からの搬入土器と在地系土器を峻別することが当該地域の土器様式を理解するうえでも極めて重要かつ有効な手段となっている。かつて「庄内式」壺を河内産に限定した	
②耳原遺跡 N地点	1	1	5	0		
③天神山遺跡	0	0	1	0		
④安美遺跡 N5地区	10	3	4	0		
⑤安美遺跡 45地区	1	1	1	1		弥生前期中段後半
⑥成宗山遺跡 溝5	0	1	0	0		弥生前期新段前半
合 計	15	10	15	1		
	[60%]	[40%]	[93.8%]	[6.2%]		
①+②+③+④	14	8	14	0		
	[63.6%]	[36.4%]	[100%]	[0%]		

表6 三島地方晩期終末の深鉢口縁部集計表
(宮田遺跡のC類は除いている)

のと同様に、狭義の長原式というか真正な長原式を生駒西麓産に限って用いる⁹⁹ものとし、A種土器については長原式併行型式として理解したい。それに加えて、長原遺跡の報告では口縁部突帯のa1〔家根1982〕本項でいうならばB種b類)を理論的に長原式から分断し、あくまでも船橋式の範疇におし止めている(様式的に両型式の接点部分での共存は可能である)が、それはまさに資料①・②・④が整合性をもって存在していることから、一定支持できるものとおもわれる。

これまで三島地方の晩期終末の資料はA種(a類・b類)土器とB種(a類)土器の共存とその形態的特徴から、「船橋式～長原式」と一括して表示するものが多かったと思うが、上記の条件のもとに検討しなおしたところ、船橋式期が2遺跡に減少し、長原式期は8遺跡とその4倍(表5)にも達することになった。さらに土器片の現有点数では船橋式が10点に満たなくなったのに比べて、長原式は174点(以上)を数えるなど圧倒的な差になって現出するようになった。このような状況は船橋式の存続期間が長原式に比べて相対的に短かったことを示唆する。すなわち船橋式から長原式への移行が主体的になされた河内地域ではスムーズに型式変化したのに対し、三島では河内からの影響化にはじまったA種深鉢のb類からa類への移行が緩慢におこなわれた結果、a類土器とb類土器の共存が普遍的にみられるようになり、しかもその転換が完全に達成されないまま弥生土器が本格的に獲得されてしまったものとおもわれる。宮田遺跡や安満遺跡でみられる口縁部が屈曲して小さく立ち上がる地元産の浅鉢(図4-12、図6-19)が河内地域より遅くまでのこることも、当該期の深鉢A種b類の在り方と軌を一にするものとしてとらえられる。

このように三島地方の2条突帯文土器以降の型式変化が生駒西麓産の畿人土器によって主導されていたことはほぼ確実とみられるが、このことはひとり三島地方だけでなく、河内の周辺地域ではどうも通有のことであつたらしい。口酒井遺跡の第6次調査では滋賀里Ⅳ式後半から船橋式にかけての編年観が呈示され、第1段階(滋賀里Ⅳ式期)・第2段階(移行期)・第3段階(船橋式期)という変遷が唱えられている。そのなかで生駒西麓産土器の比率は概算で1割・2割・3割と段階的に増えていくことが確かめられ、それに並行して深鉢・浅鉢の形態や器種構成など短期に活発な型式変化が認められている。また口酒井遺跡の11次調査〔南ほか1988B〕でも、かなりまとまった量の突帯文土器が西群と東群に別れて出土している。そのうち深鉢の口縁部片が突帯の位置からA・B・C・Dの4類に分けられているが、A類が小稿でいうb類に、B・C・D類がa類にそれぞれ該当することになる。したがって西群の102点は、小稿の分類に換算すればA種a類

が22点、同b類が19点、B種a類が54点、同b類が7点となり、同じく東群の39点は、A種a類が4点、同b類が8点、B種a類が18点、同b類が3点となる。具体的にいうと、西群では生駒西麓産の深鉢が全体の60%、東群では同じく64%と高い数値を示し、三島での耳原遺跡にも匹敵するものとなる。しかし地元産のなかに長原式の典型である器形II b 3(南ほか1988B)がみられないのは、やはり河内と摂津のあいだで型式変化にずれがあったことを示すものであろう。また生駒西麓産土器「a類+b類」に対する「b類」の割合は西群で11.5%、東群で11.1%となり、これを長原遺跡の分類基準で考えるならば、少量の船橋式土器と多くの長原式土器が混在していることになり、ここでも船橋式が長原式前段の小型式として存在していることが暗示されている。

以上のように摂津の各遺跡出土の突帯文土器は、時間の経過とともに生駒西麓産土器の割合が増加し、しかもそれにつれて地元産の土器も漸次型式変化していく様子うかがえよう。ちなみに河内からやや離れた山城での状況をみると、高倉宮下層遺跡(南ほか1988A)や宇治市寺界道遺跡(鎌向ほか1987)などでは生駒西麓産土器の搬入品は極端に少なくなり、あきらかに長原式併行期の土器を伴出する一括資料であっても、口縁端部に刻目をもつ滋賀里Ⅳ式的な深鉢や船橋式併行期の形態を示すものなどの旧来の型式要素を温存している資料がかなりの割合で混在している。このことは浅鉢の占める割合が河内周辺地域と比べて高いということや壺が欠落しているといったことからもうかがえる。すなわち同じ長原式期であっても生駒西麓産の搬入率の違いによって地元産の土器形態がかなり左右されるということであろう。

まとめにかえて

今回、宮田遺跡の調査を契機として、三島地方の縄文土器を集成してみた。繰り返し述べているように、この地域での縄文遺跡はまだまだ少なく、良好な資料は蓄積されていない。したがってこれまで縄文土器の本格的な研究もみられず、わずかに市史などで断片的な紹介がなされているにすぎない。ここでは現有資料をもとに、三島の動向について簡単にみておきたい。

図15には縄文遺跡の分布を時期別に記しているが、各遺跡は低地に立地するAタイプ(標高5m未満)と山麓部から平野部にかけて立地するBタイプ(標高5m~30m)および台地や丘陵部に立地するCタイプ(標高30m以上)の3種に分けることができる(表5)。Aタイプの遺跡(大塚・柱本)は当時から交易路として活用されてきた淀川の自然堤防上にあつて、出土した土器のパラエティからみても集落が相当の期間、断続的に営まれて

いたと考えられ、東海系条痕土器や咲畑式土器などの資料は往時の交易範囲を雄弁に物語っている。おそらくこのAタイプの遺跡は三島地方の地域性を背景として成立していたのではなく、畿内と東海あるいは瀬戸内といった他地域との往還のなかで存在していた集落とみなされる。それに対して、B・Cタイプの遺跡はいずれも中・小河川の傍らに営まれた集落であり、その存続時期もかなり限定されている。いまのところ前期は大歳山式を検出している東奈良遺跡だけで、中期も船元式をもつ天神山遺跡と塚穴遺跡ぐらいで、いずれも微々たる資料しか出土していない。三島平野全体に集落が展開されるようになるのはどうも後期になってからで、それも中葉以降のことらしい。『桑飼下遺跡』(渡辺ほか1975)によれば、後期前半にアク抜き技術をとまなう植物採集、定住村落の形態、深鉢・浅鉢・鉢・注口土器からなる器種のセット、精神文化(抜歯の風習・石棒・白形耳飾り)などの多大な文化要素が東日本から伝播してきたことが唱えられている。その結果、それまでの生活形態が変化すること、とりわけ行動領域の拡大がひきがねとなって、低湿地への進出がはかられたとされており、三島での後期段階での状況も斯くのごとくであったかと思われる。宮田遺跡の『概要報告』(森田1989)で、東日本系の深鉢D類が宮田遺跡I群の段階で在地化したとみたのも、後期前半に流入してきた東日本の文化要素がこの時期までに十分消化・吸収され、安定した段階に至っていたと判断したためである。晩期では塚原遺跡のように台地上にも集落が出現する一方で、沖積地への進出がさらに活発になってくる。耳原遺跡では滋賀里Ⅲ式期以降に墓地が形成されるなど、具体的な遺構が認められるが、この時期の遺跡の多くは長原式などの終末期のものであり、遺跡単位では弥生前期と競合するものが多い。現在のところ三島での農耕のはじまりは、牟礼遺跡で発見された井堰を滋賀里Ⅳ式期と理解することによって、一気に遡ることとなったが、本文でも触れたように、時期比定にはいまだ慎重でありたいし、合掌型堰は滋賀里Ⅳ式期としては立派すぎるようにも思われる。

また前項で縄文土器を概観したとき、生駒西麓産土器にかなりこだわって記述してきた。摂津では早・前・後・晩期の各期に相当量が搬入されていたと考えられるが、これは河内周辺地域では普遍的にみられる現象でもあり、河内と隣地域との交流の結果、それぞれの地域にもたらされたものであろう。生駒西麓産にある縄手遺跡(中村ほか1976)では後期の底部破片数216点のうち、在地産(ここでいう生駒西麓産)のものが87.5%を占め、外来品が12.5%の割合で検出されていることなどは、数少ない相互交流の証である。しかしながら三島での後・晩期の資料では他地域産(この場合ほとんど生駒西麓産)の比率は縄手遺跡の他地域産よりも相対的に高くなっており、三島以外の河内周辺地域

でもほぼ同様の傾向がうかがえるとしたら、河内から搬出される生駒西麓産土器と河内に搬入される土器とでは前者が圧倒的に多かったことが予想される。では何故そうなのかというと、そう簡単に答えはでないが、ひとつの事実としては三島で後期中葉に遺跡が増えたとき、あるいは晩期末葉に稲作が伝播してきたときなど、いわば変革期に生駒西麓産土器の割合が目立って増加するのである。いいかえれば河内の周辺地域で需要が高まってときに、そこへ十分な土器を供給するだけのシステムが生駒山西麓の地域においてすでに醸成されていたとみている。石器など素材に一定の制約があり、しかも原産地が限られている資料については、原材の一方的供給は当然のことであろうが、おそらく生駒西麓産土器もこれに似た状況が考えられるのでないだろうか。『口酒井遺跡』〔浅岡1988〕では、口酒井期以降に生駒西麓産土器が高率を占めることについて、「狩猟・採集社会から農耕社会へ移行する画期にあたり」、「その社会の中心的役割を担った地域（河内）との交流が大きなウェイトを占めていた」結果だろうとしている。一見妥当な見解とみられるが、この時期に河内地域がすでに稲作農耕の「中心的役割」を担っていたかどうかは疑問である。私はこの時期の減少をあくまで畿内縄文社会のシステムのなかに、はじめて稲作が伝播してきた段階の出来事ととらえており、生駒西麓産土器が周辺地域に数多く搬出されるのも、畿内縄文社会の枠組のなかでつねに優秀な土器を供給してきた河内（生駒山西麓）地域が、この画期的な変動と地域間交流を背景にして、土器生産を活発におこなったためとみている。さきに河内周辺の地域において、晩期後半の時期に生駒西麓産土器の搬入率が20%前後とみられる遺跡と60%以上みられる遺跡を認めたが、前者が後・晩期の河内周辺地域では通有の現象とみられるのに対し、後者は突出した在り方とみなさざるを得ない。こうしたアンバランスはこの変革期の波を強く受けたか弱く受けたかの違い、いいかえれば遺跡（集団）単位での稲作農耕への依存度の違いを示しているのではないだろうか。この結論を得るには、石器をはじめとするその他の遺物の在り方や個々の遺跡の立地など、総合的にみていかなくてはならず、将来の課題としたい。

付 記

小稿をなすにあたり、泉拓良氏に種々教示いただいた。また、資料整理を快諾された富成哲也・橋本久和・西口陽一・奥井哲秀・井上直樹・宮脇 薫・辻本充彦の各氏にも、心より感謝申し上げます。なおそのほかにも資料や情報の収集で多くの方々にお世話になったが、とくに柱本遺跡・大塚遺跡で採集した縄文土器を提供された（故）島谷 稔氏（平成元年2月17日逝去）には、深甚なる敬意を表したい。

島谷氏といえば三島をおもな研究領域とされた在野の考古学者であり、長年にわたり丹念に収集されてきた古瓦の類は三島の歴史を語るのに欠かすことのできない貴重な資料になっている。また氏は建築技師としての才覚から、つねに瓦のバリエーションを屋根の構造と結びつけて理解するように心がけておられたように思う。そして長身で飄々とした風貌はその学問的態度とも重ねあわせられ、私が学生の頃に東大寺瓦窯・法照寺瓦窯・梶原寺瓦窯などの踏査に同行させていただいたときの懇切なるご教示を懐かしく思い出す。その後、遺跡の調査に携わるようになってからも、梶原寺跡や芥川庵寺瓦窯の現場で、有益な助言をいただいたことも忘れられない。本来は古瓦の研究で学恩に報いるべきであるが、それは将来の約束事としたい。今回は島谷氏の忌明けにあたることでもあり、まずは小稿をもって霊前に捧げるものである。(1989. 3 記)

注

- 1 島谷 稔・西口陽一氏らの採集資料。
- 2 島谷 稔氏採集資料。
- 3 31は壺の可能性もあるが、一応深鉢に含めている。
- 4 辻木充彦氏採集資料。
- 5 以前にこの南隣の調査区でもこの6-E・F地区の資料と一連のものを若干検出している。参考までに図版第14-Cにその出土遺物を転載している。
- 6 ここでいう生駒西麓産土器は淡茶褐色・茶褐色・暗茶褐色系統の色調を呈し、胎土に角閃石を含んでいるものである。ただし資料ごとに角閃石の形状や含有密度にばらつきがみられ、ここではそれらを一括してとらえていることから、採取地としては山麓部から扇状地まで含まれることになる。そういう意味では河内系の土器とすべきかもしれないが、材料としての粘土が運ばれたものでないことは口酒井遺跡の報告(南ほか1988B)のなかで検証されている。
- 7 図15・表4には本稿で資料化していない太田遺跡と西福井遺跡のものも含めている。
- 8 能瀬町地黄北山遺跡や中筋遺跡では、生駒西麓産の押型文土器が少なからず出土しており、おなじ北摂にある三島地域でも同様の状況が予測できる(大塚研1989)。
- 9 泉北考古資料館で実見。
- 10 これによく似た状況は和泉でも認められる。例えば堺市船尾西遺跡では、生駒西麓産土器の搬入率が62%であるのに対して、同じく鈴の宮遺跡では35%となっている(北野1985)。
- 11 『長原遺跡』(家根1982)で器種別・型式別に40項目に細分された呈示資料から生駒西麓産以外の資料をすべて差し引いたところ、浅鉢A類の一部・同B類の一部および壺A類の一部(これは浅鉢A1類・B2類・壺A2類が該当するが、いずれも1点の資料で設定されているものである)が欠落するだけで、長原式の組成は基本的にかかわらず、当該型式の存在形態にはなんらの不備も生じない。

引用・参考文献一覧

- 浅岡 俊夫 1988「伊丹市口橋井遺跡の凸帯土器」『高井節三郎先生喜寿記念論集 考古学と歴史学』
- 網谷 克彦 1981「5.前期の上器(北白川下層式土器)」『縄文文化の研究』3
- 網谷 克彦 1981「鳥浜貝塚出土縄文時代前期土器の研究(1)」『鳥浜貝塚1980年度調査報告』
- 飯島 正明 1986「笑面市の縄文遺跡」『笑面史学会』Vol. 1-2
- 石川日出志 1985「中部地方以西の縄文時代晩期浮線紋土器」『信濃』34-7
- 泉 拓良 1981「3.後期の土器(近畿地方の土器)」『縄文文化の研究』4
- 泉 拓良 1986「縄文と弥生の間に」『歴史手帖』14巻4号
- 茨木市教育委員会 1973『茨木の歴史』
- 茨木市教育委員会 1965「牟礼(むれ)遺跡」発掘調査現地説明会資料
- 大阪府立泉北考古資料館編 1989『縄文の世界 -大阪平野の形成と縄文人-』大阪府教育委員会
- 岡田 茂弘 1965「7 近畿」『日本の考古学II(縄文時代)』
- 奥井 哲秀ほか 1981『東奈良 発掘調査報告II』茨木市教育委員会
- 奥井 哲秀ほか 1982『耳原遺跡発掘調査報告』茨木市教育委員会
- 北野 俊明 1985「石津川流域における縄文時代晩期の二つの遺跡について」『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズII
- 張向 敏一ほか 1987「IV. 寺界寺遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概要集』第10集
- 高槻市教育委員会 1974「10. 安満遺跡」『昭和47・48年度高槻市文化財年報』
- 田辺 昭三ほか 1973『湖西線関係遺跡調査報告書』湖西線関係遺跡調査団
- 中村 友博ほか 1976『縄手遺跡2』東大阪市遺跡保護調査会
- 野島 敏 1983「府山下遺跡の瀬戸内系土器」『日本の古代遺跡II(大阪中部)』
- 橋本 久和 1969「5.5-D、6-A・E・F地区の調査」『輪上郡西跡他関連遺跡発掘調査概要・13』高槻市教育委員会
- 原口 正三 1973「縄文時代」『高槻市史』第六巻(考古編)
- 原田 修・大野 薫 1981「第2章 馬場川遺跡の調査」『馬場川遺跡・上六万寺遺跡・山畑66号墳調査報告』東大阪市教育委員会
- 前田 豊邦ほか 1980『地黄北山遺跡・横町遺跡調査概要』熊野町教育委員会
- 間嶋 忠彦・間盛 茂子 1971「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報 第7号』(財)倉敷考古館
- 松尾 信裕 1978「V遺物1)縄文土器」『森の宮遺跡第3・4次発掘調査報告書』難波宮址顕彰会
- 松尾 信裕 1983「第1項 長原式土器塚跡A類にみる器形の変化」『長原遺跡発掘調査報告書III』(財)大阪市文化財協会
- 南 博史ほか 1988A『平安京左京三条西坊四町』(財)京都文化財団
- 南 博史ほか 1988B「口酒井遺跡 -第11次発掘調査報告書-」伊丹市教育委員会
- 宮脇 薫 1986「縄文晩期の水田跡-大阪府牟礼遺跡」『季刊考古学』第15号
- 森田 克行 1981「73. 安満遺跡」『昭和53・54・55年度 高槻市文化財年報』
- 森田 克行 1989「23. 宮田遺跡の調査」『輪上郡西跡他関連遺跡発掘調査概要・13』高槻市教育委員会
- 家板 祥多 1981「4. 晩期の土器(近畿地方の土器)」『縄文文化の研究』14
- 家板 祥多 1982「第1項 縄文土器」『長原遺跡発掘調査報告書II』(財)大阪市文化財協会
- 山元 建ほか 1987『野畑春日町遺跡-第1次調査報告書-』野畑春日町遺跡発掘調査団
- 山元 建ほか 1988『野畑春日町遺跡-第2次調査報告書-』野畑春日町遺跡発掘調査団
- 渡辺 誠嗣 1975『桑畑下遺跡発掘調査報告書』平安博物館
- 渡辺 昌宏 1981『中筋遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会

編集後記

増え続ける発掘調査件数に対応するために、『高槻市文化財年報』の体裁を一新することにしました。この『年報』は本市の文化財基本調査・啓発事業・埋蔵文化財調査の概略を一冊にまとめ、昭和47年度から順次刊行してきましたが、本冊以降は埋蔵文化財の調査の部分について従来の網羅的な概述方式をあらため、全体の把握は一覧表の作成によってクリアしました。そのなかで国庫補助事業の調査については『実績報告』によって遺漏なくとりあげ、またそのほかで重要とおもわれる調査は『年報』で個別に扱うことにしました。

そしてこれを契機としまして、市立埋蔵文化財調査センターの大切な事業のひとつである研究活動の一端を紹介すべく、『年報』のなかに「資料紹介」や「研究ノート」を採り入れるようにして、ある種『紀要』としての活用をめざすようにしました。今回は三島の縄文土器の資料紹介ということで起稿した小文をすこし発展させて「ノート」としてまとめました。

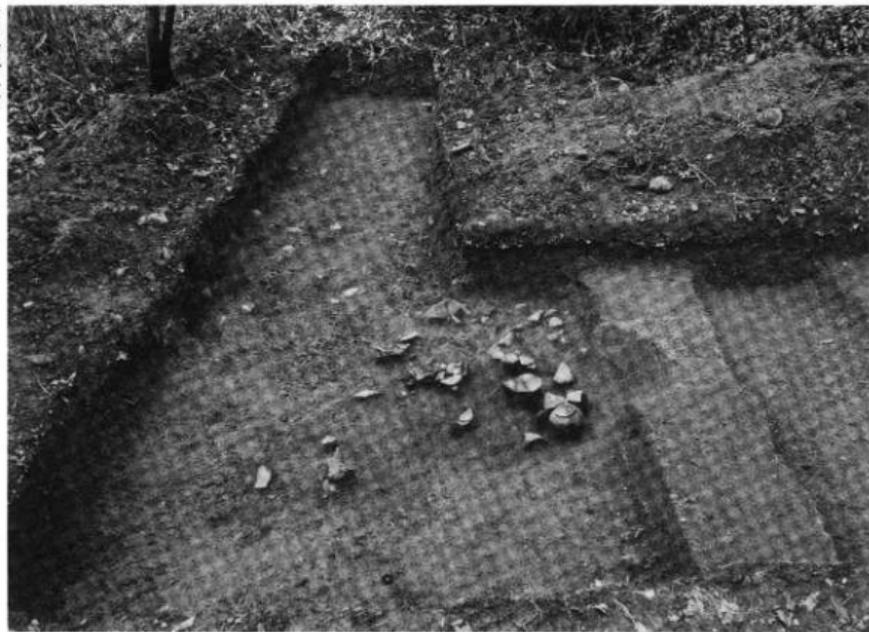
(Y・M、K・M)

四 版



埋蔵文化財調査位置図

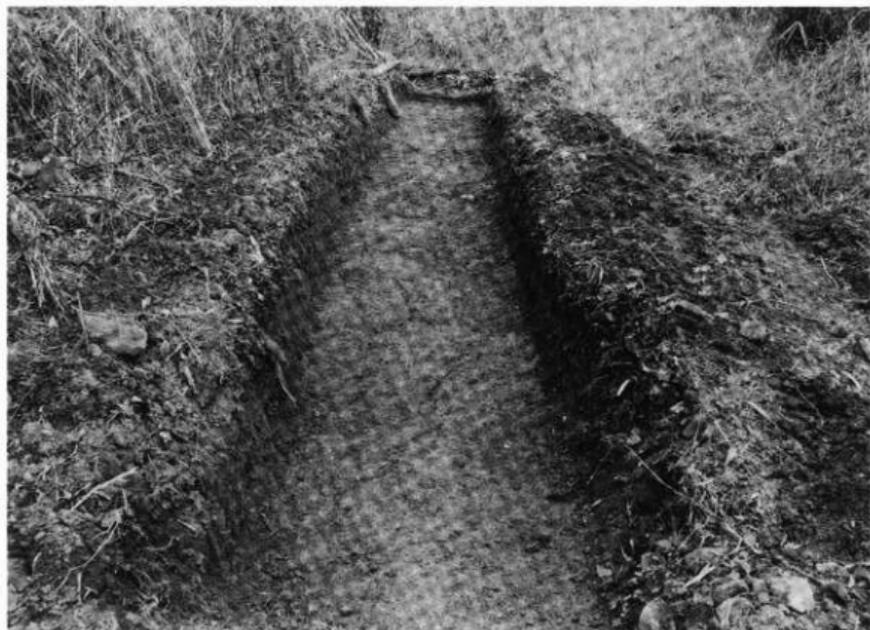




a. 上土室遺跡 I トレンチ全景（東側から）



b. 上土室遺跡 I トレンチ土墳墓1（両側から）



a. 上土室遺跡 Kトレンチ全景（西側から）



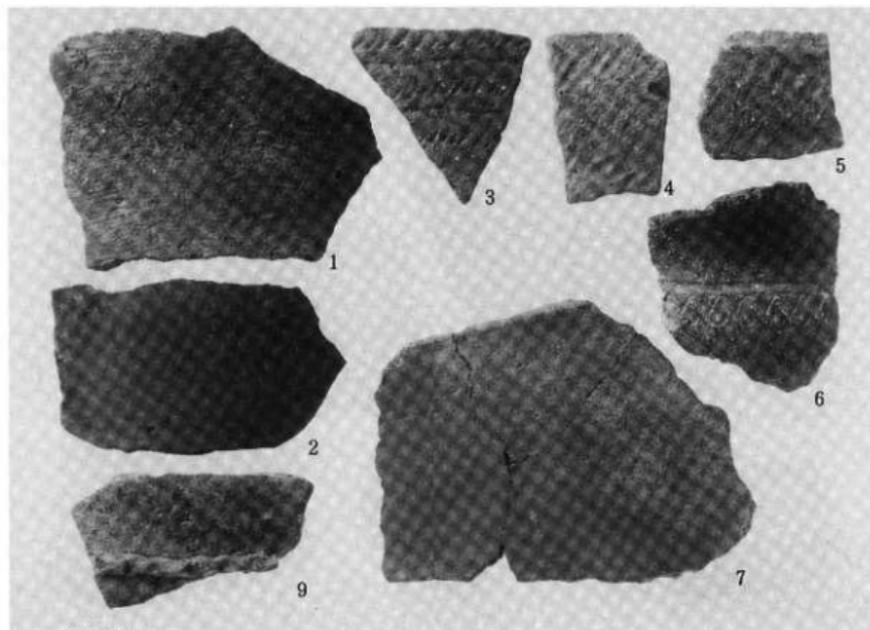
b. 上土室遺跡 Kトレンチ土構築2（南側から）



a. 慶端寺菩薩形坐像正面・側面

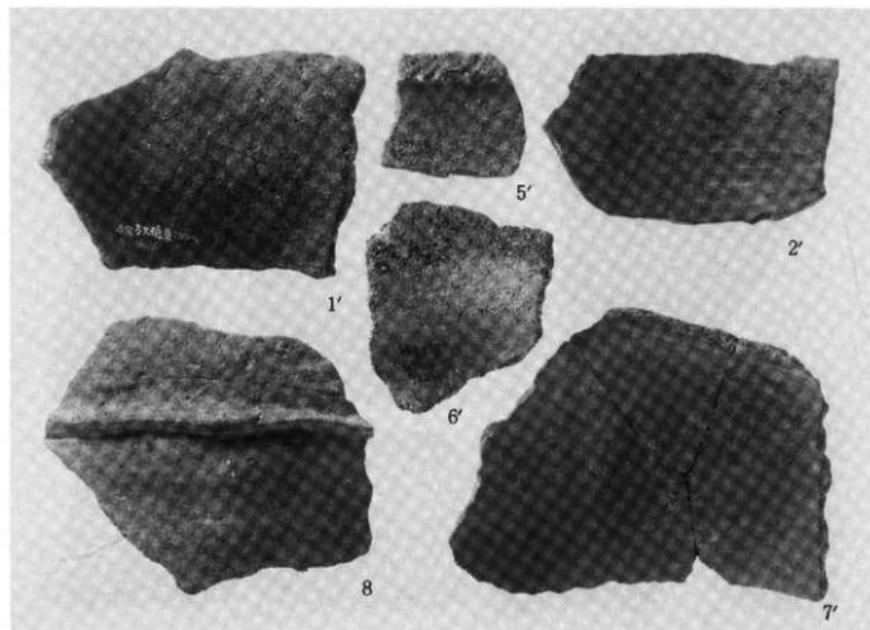


b. 菩薩形坐像背面・右前面



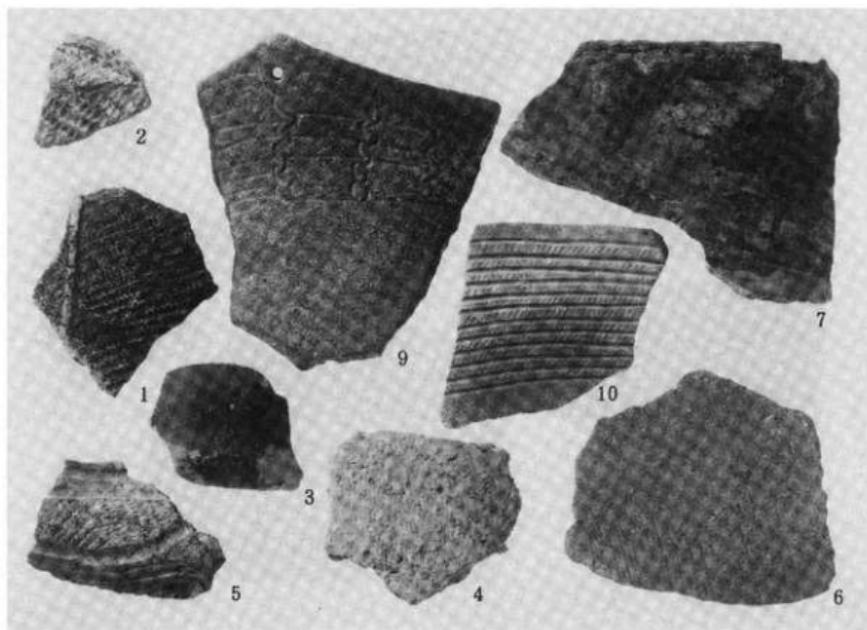
a. 大塚遺跡 (1~7・9)

約 $\frac{1}{2}$



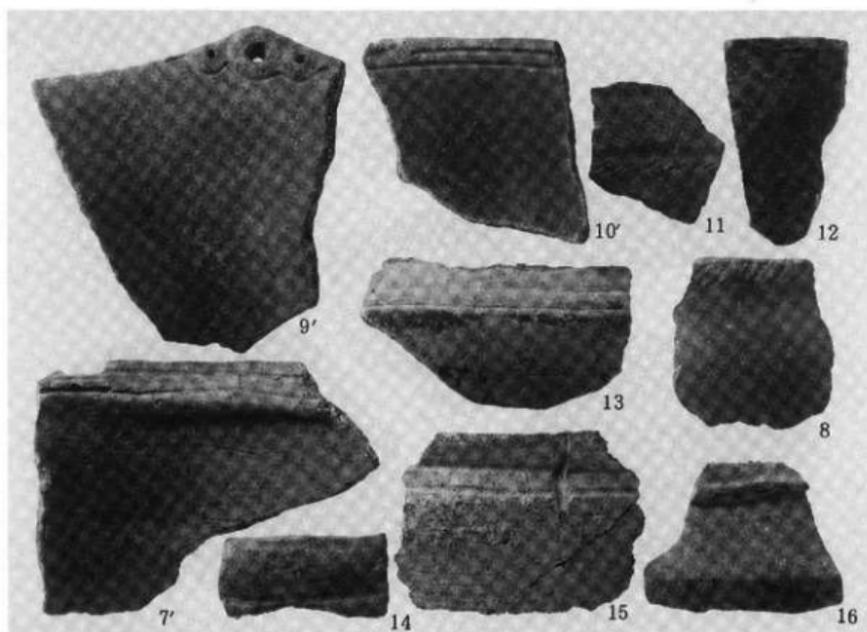
b. 大塚遺跡 (1'・2'・5'~7'・8')

約 $\frac{1}{2}$



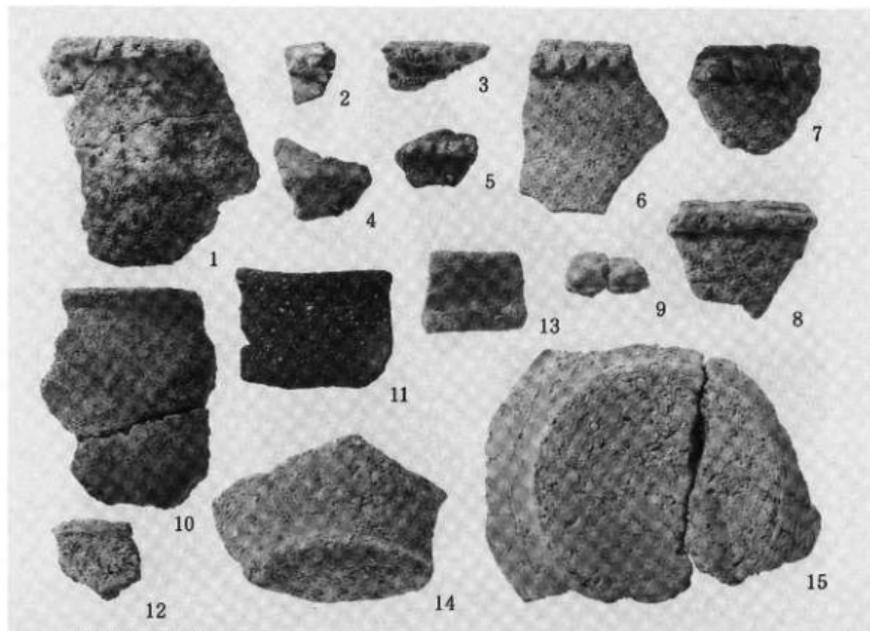
a. 柱本遺跡 (1 ~ 7 · 9 · 10)

約 $\frac{1}{2}$



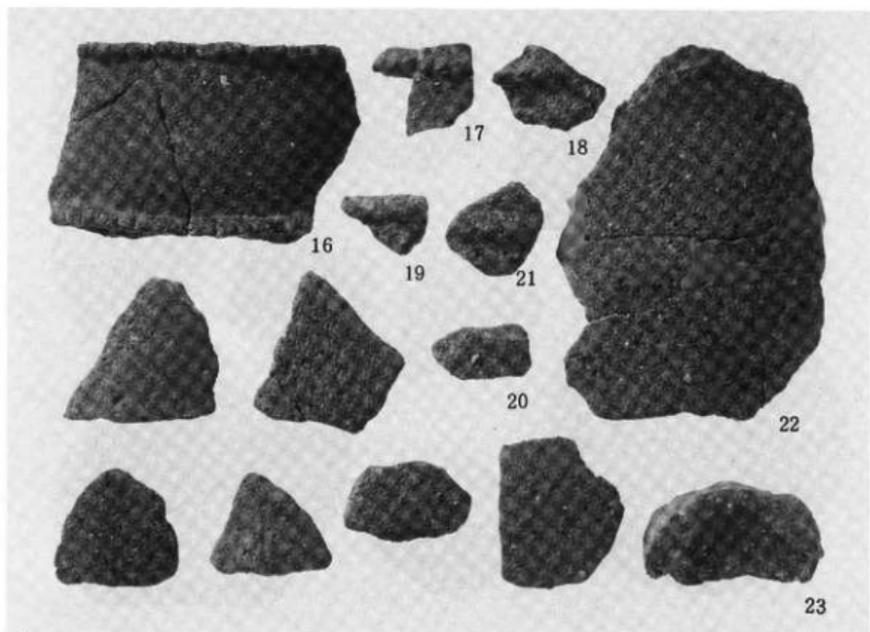
b. 柱本遺跡 (7' · 8 · 9' · 10' · 11 ~ 16)

約 $\frac{1}{2}$



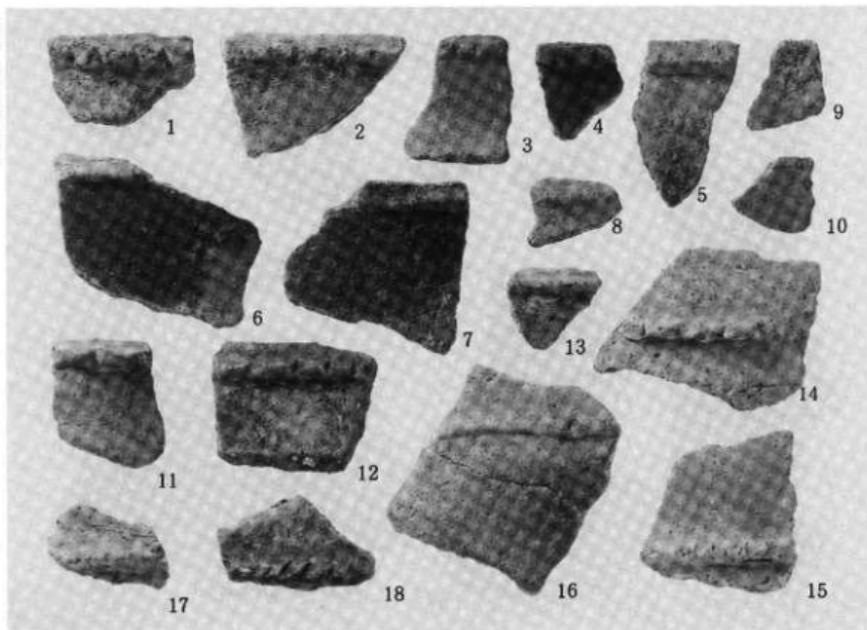
a. 宮田遺跡A地点〔A種〕(1~15)

約 $\frac{1}{2}$



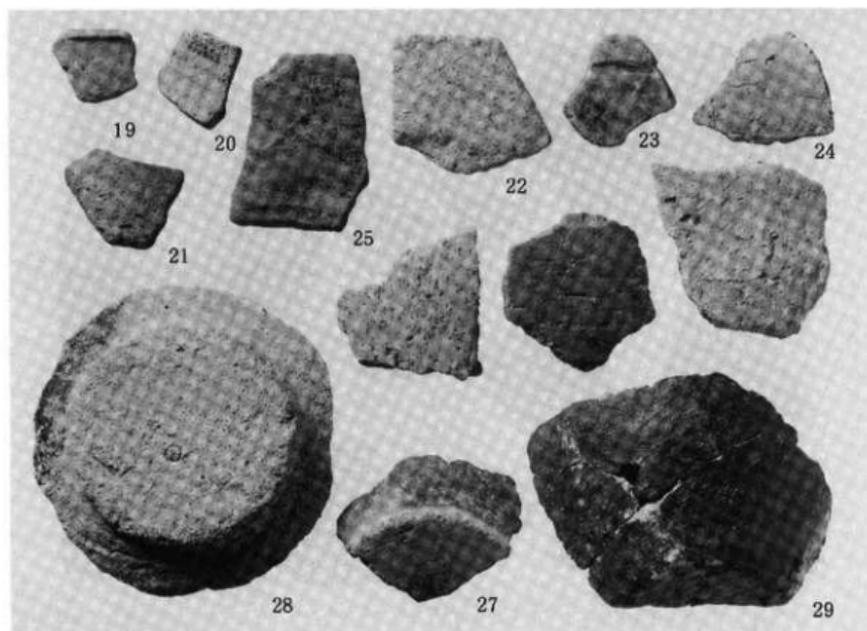
b. 宮田遺跡A地点〔B種〕(16~23ほか)

約 $\frac{1}{2}$



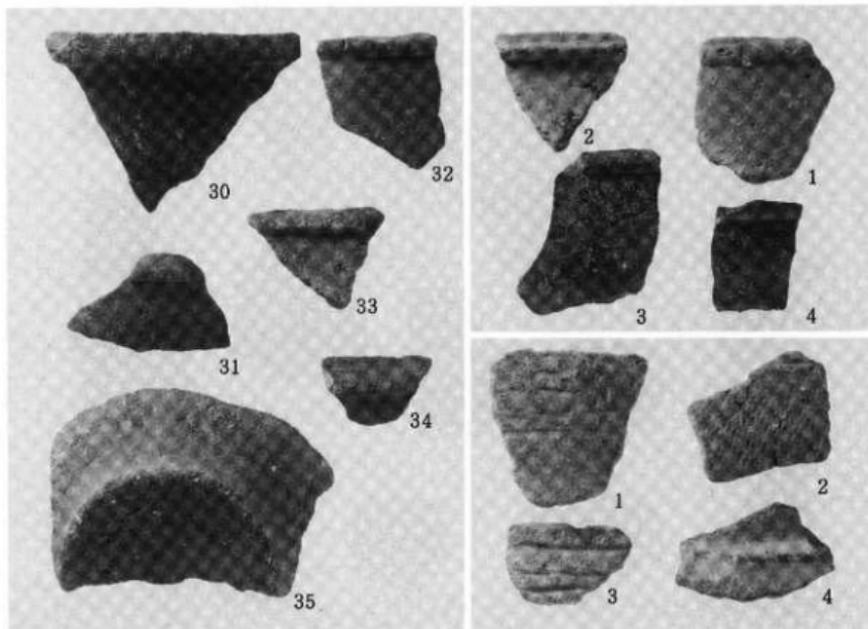
a. 安満遺跡 N 5 地区〔A種〕深鉢(1~18)

約 $\frac{1}{2}$

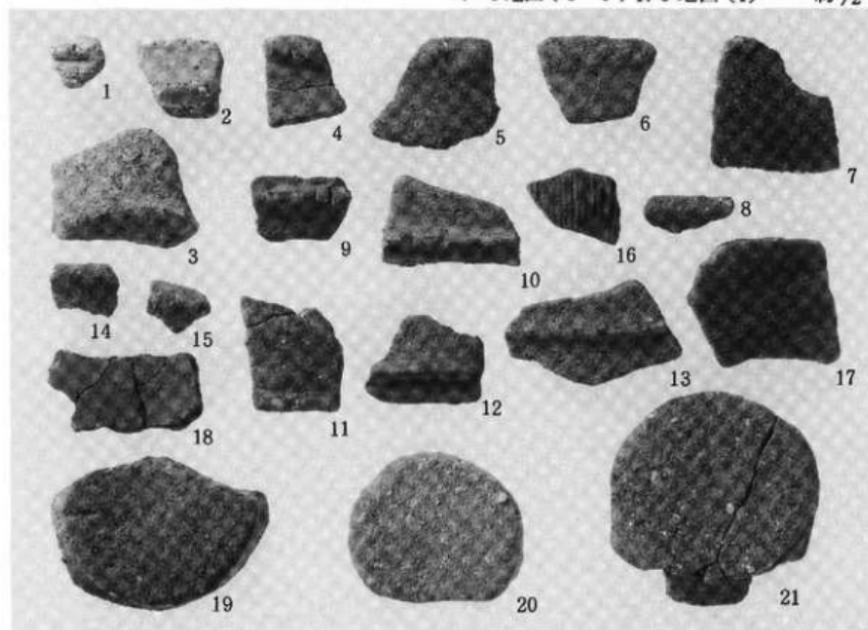


b. 安満遺跡 N 5 地区〔A種〕浅鉢(19~25)底部(27~29) その他深鉢体部片

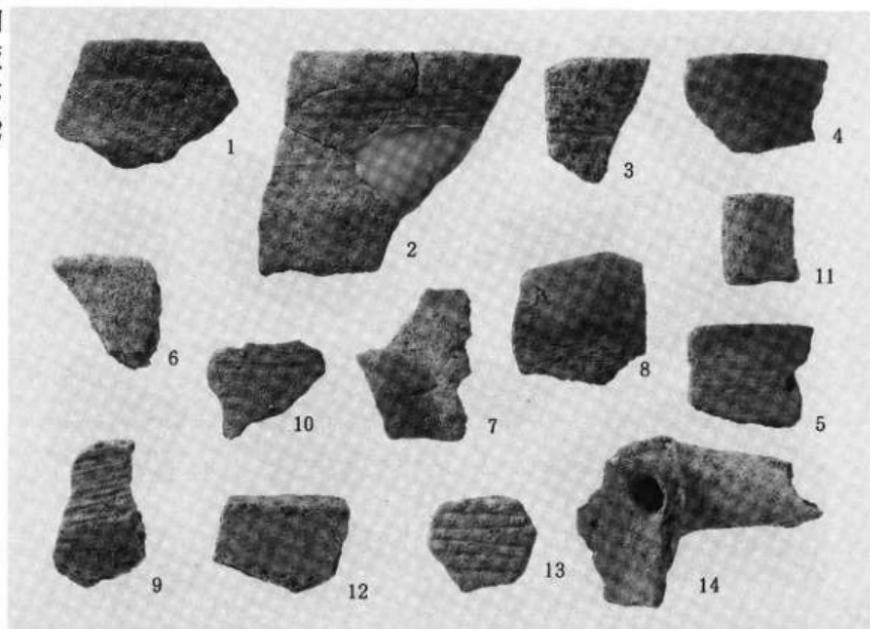
約 $\frac{1}{2}$



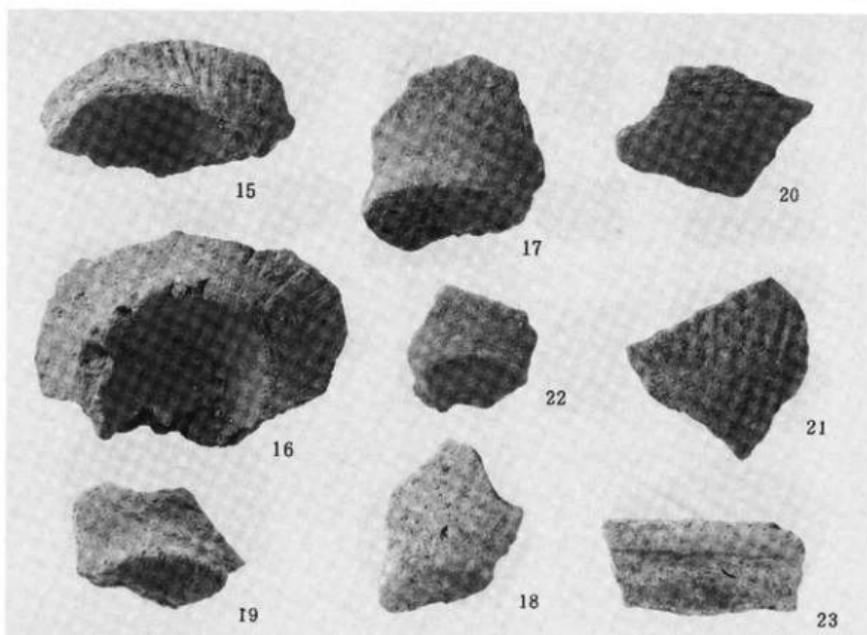
a. 安満遺跡 N 5 地区〔B種〕深鉢(30~35) b. 45地区〔A種〕(1・2)〔B種〕(3・4)
c. 9地区(1~3) N 5地区(4) 約1/2



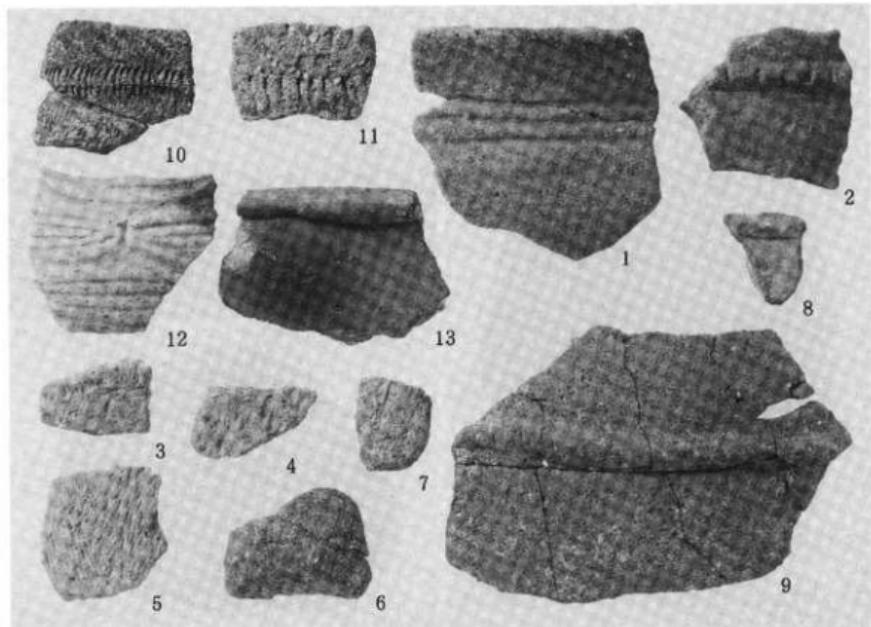
d. 耳原遺跡 N 地点〔A種〕深鉢(1・2)底部(3)〔B種〕深鉢(4~17)浅鉢(18)
底部(19~21) 約1/2



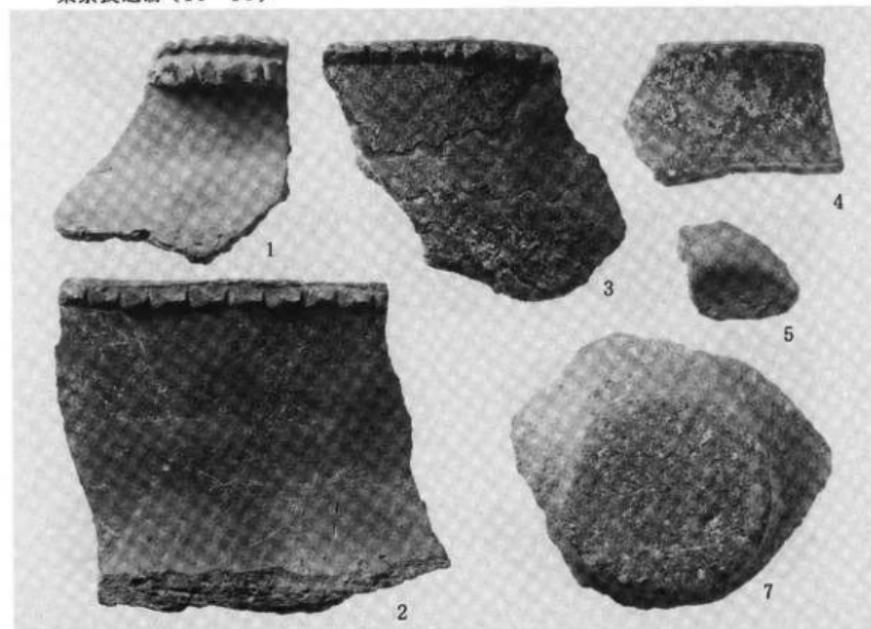
a. 郡家川西遺跡 6-E・F地区〔A種〕深鉢(1~10) 浅鉢(11~13) 注口土器(14) 約 $\frac{1}{2}$



b. 郡家川西遺跡 6-E・F地区〔A種〕底部(15~19) 〔B種〕深鉢(20・21) 底部(22)
その他の深鉢〔A種〕(23) その他の深鉢(22) 約 $\frac{1}{2}$

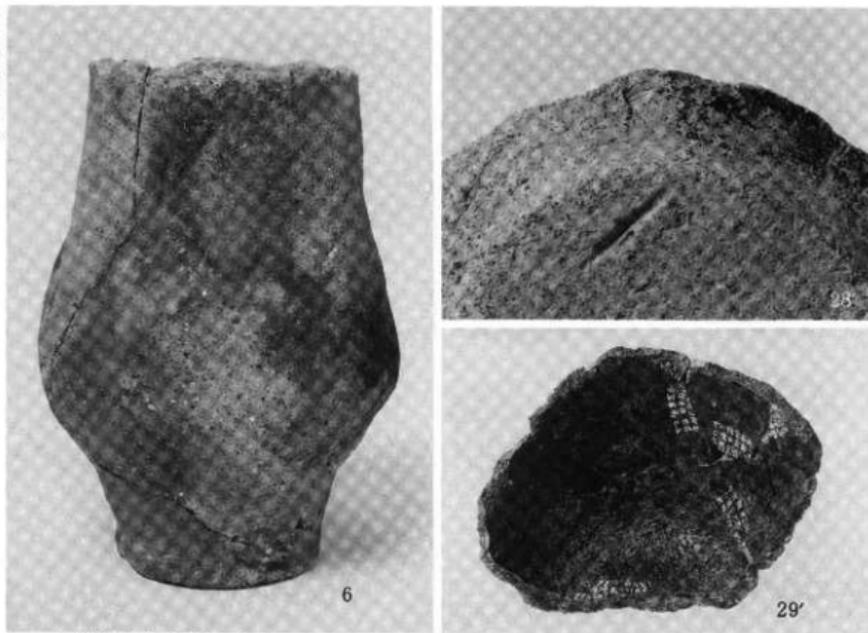


a. 郡家川西遺跡(1・2)塚穴遺跡(3~6)天神山遺跡(7・8)塚原遺跡(9) 約 $\frac{1}{2}$
東奈良遺跡(10~13)

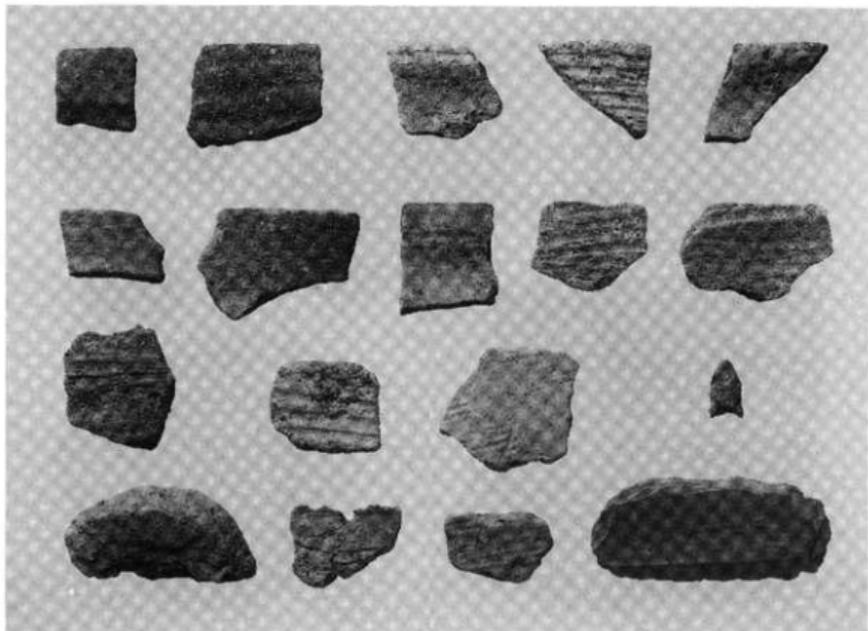


b. 牟礼遺跡(1~5・7)

約 $\frac{1}{2}$



a. 牟礼遺跡(6) b. 安満遺跡(靱の圧痕 28'・黒漆の付着痕 29')



c. 郡家川西遺跡 6-E・F地区出土の縄文土器・石器(参考)

高槻市文化財年報 昭和61・62年度

平成元年4月25日

発 行 高 槻 市 教 育 委 員 会
高槻市立歴史文化財調査センター
〒569 高槻市南平台5丁目21-1

印 刷 株式会社 邦 文 社
〒533 大阪市東淀川区大槻1丁目4番9号